

兵法諸流と武者言葉との関係についての試論

——甲州流諸派の武者言葉集について——

島 田 勇 雄

はじめに

甲州流兵法は、武田家ゆかりの士小幡景憲によって創建されたものである。景憲によって創建されたものは、兵法学史的には、中世式な兵学思考法と戦争体験とに支えられて近世初頭に成立した兵法学であって、近世期においてはいづれ遠からず過去の兵法となるべき宿命を持つ過渡的兵法学であった。たしかに学的には傑出した体系を持ったとは言えぬものではあったが、それなりの斬新さを持ち、またそれゆえそれが徳川幕府の御用学的地位を占めたことのため、おのずからその門下に天下の俊秀を聚合せしめるに至った。即ち次代の御用学者になった北条氏長や、終極的には反官学的理論体系を立てることになった山鹿素行を初め、諸藩の兵法で指導的地位を占めた多くの兵法学者をその門下から輩出せしめた。それら門下生では、北条流・山鹿流のごとく独自の理論体系を構築し一流を樹立したと解されるものがあり、氏長・素行らみずからは甲州流の一派を称することもあったが、狭義にはこれを甲州流から除くのが普通である。その他でも、岡崎康邦のごとく先師以来の伝書を廃棄して自著をもって伝書とし、流名さえも別名を称したものもあり、また小早川能久系のごとく景憲学風の従順な継承者もあるが、多くはそれらの中間で、景憲以来

の若干の著書を共用するほかには独自の著書を使用しそれぞれ独特の体系を立てた。したがって狭義の甲州流といえども、その兵学上の内実は多種多様であった。

本稿の目的とする武者言葉とそれら甲州流諸派との相関々係は、それぞれの流派の兵法学上の理念と体系とに依じて、武者言葉集の存否が定まり、またその存在意義を異にするということになる。ただ現在は、その残存資料が限られ、諸派と武者言葉との資料関係がすべて明確にされているとは言えない状況にあるため、諸派と武者言葉との相関関係を確言的に論じることができない。たとえば、北条流は戦争技術先行の理論体系を構築したと考えられ、氏長時代には言語技術もしくは軍礼としての武者言葉集にはほとんど関心を持たない方向で体系を構築したと考えられる。

それに対し山鹿流では、士道というような人間学的要素に重点をおく体系を構築したため、当初から武者言葉に関心を示していた。その北条流でも、その末流は武者言葉集を具えるに至った。また景憲の体系のように、根幹的主著と言えるものを持たず単元学習的な各論的著書の総合によって体系をまとめる、という方法のばあいも、それと同様であり、結果的には武者言葉集を持つものと持たぬものとができてくる。そのように、諸派における、武者言葉に対する認識いかん、武者言葉集の存否いかんは、兵法学上の理念や体系と密接に関係するものと思われるが、ただ時代がくだるとともに、傾向としてはほとんどの兵法学の諸流派がなにかの武者言葉集の作成に留意する風潮が生じたように思われる。

本来現代流の戦争論からすれば、兵法学では、戦術・戦略の論や武器・装備の論などこそ中心的な問題になりこそすれ、武者言葉のような戦争行為とは直接結び付かないものが兵法学の部門の中に取り入れられること自体が異様なはずである。にもかかわらず、その存することが近世日本兵法学の特徴であり、同時に近世日本兵法学が現代的戦争論とは異質であり、むしろ人間学的要素の強い哲学であったことを示すものでもある。しかし武者言葉は、実体的には中世的思考の残存なのである。それは中世の武士集団の生活意識の中に生き生きしたものであり、その形骸が近

世に武者言葉の形式で兵法学に導入されたのである。かつて中世では、言語集団としての武家社会での特殊な使用語彙であった。特殊なというのは、原則として日常用語としては使用せず、戦場でのみ宗教的要素や儀礼的要素を含めて使用した、ということで、そのような条件での使用語彙であった。ところが、近世になって、太平の世が続き、かつて特別の気持を籠めて戦場で使用したことの意義が新世代人に忘れられようとしたとき、それを承知した旧世代人の注意を呼び、それに伴い、改めて兵法学で学術語として指導する必要が認識され、漸次その指導態勢が確立し、指導内容にも変化が生じた。⁽³⁾即ち近世におけるそれは、使用語彙ではなく、学術的指導によって知的に指導された理解語彙であった。また武者言葉・軍詞・軍中詞などの術語で抱括される語彙も、その意義群の範囲が一般に中世より拡大しているし、諸流派によって意義群の範囲にも出入があり、もちろん兵法学上の位置づけも相違している。それらの歴史的経緯が甲州流の生成・変遷とどうかかわりあうか、それが私の問題点であるが、それは同時にその間に言語集団としては武士階層一般から学者集団へと変転しておりそれらの言語集団の転換に伴いそれが武者言葉に対する視座を次第に転換するということになるわけであり、そのことも同時に別個の言語的関心をそそられる問題である。

第一 小幡景憲と武者言葉

その一 甲州流の概観

天正一〇年三月天目山の合戦により武田家の滅亡した時には、小幡勘兵衛景憲はわずか一一歳の少年であり、武田家の遺臣の分散に伴い、大叔父小幡光盛を頼って暫時越後に身を寄せたが、まもなくその年の十二月、当時七歳の秀忠の小姓として徳川家に仕えることになった。家康の政策によって、武田家の遺臣の多くが徳川家の譜代に吸収されたり井伊家に預けられたりしたのである。景憲がそのちも井伊家やその家臣と密接に連絡していたのもそのため

ある。ついて二四歳の時徳川家を浪人して諸国遍歴の旅に出、その間伊藤流の剣の奥義を究め、儒学・禅学を修めるとともに、「訓閲集」系の軍配兵法の研修や信玄関係の軍法の研鑽につとめて甲州流創生のための基礎的教養の習得につとめた。更に大阪の陣にあたっては、大阪城内にあって諜報活動につとめ、夏の陣の終了後秀忠に謁して二〇余年の浪人生活を清算して旗本に復帰し、禄高千五百石に登り、寛文三年九二歳で天寿を全うした。

甲州流兵法は景憲によって樹立されたものであって、景憲以前にすでに信玄らによってその具体的な兵法学体系が成立していたわけではない。そのことは謙信流を標榜する要門流においても同様で、それらの建学はほぼ類似の情況を辿るものである。つまり景憲は武田家滅亡の時には一歳の少年であつたし、その年齢の少年にふさわしく、実戦の体験も持たず、兵法学の具体的な習練の機会も持たなかつたのであり、彼の建学は二四歳以後二〇余年にわたる浪々の生活の中で宮為基礎的習練が蓄積され、以後旗本に復帰して以後も宮々と錬磨され、彼が七〇歳に至る頃一応の大成を見たと考えられている。景憲の少壮有為の時、世に行われた体系的兵法学と言いうるものには、わずかに「訓閲集」を挙げうるのみであり、彼はそれについては上泉信綱の体系と岡本半介の体系とを学んだ。「訓閲集」の体系としては、この二派が従前の小笠原家風な古式な体系を戦国時代の戦闘に適應できる兵法へと自己改革しつつあり、おそらく当時では新風をはらむ兵法学として注目を受けていたと考えられる。それと同様に、景憲もこの中世末的な、しかも新風をめざして自己改革するという体質を、その兵法学的思考の培養土壤として備えていた。それは、彼らがひとしく、その人となる頃もしくはそれ以前に主将のために主家が滅亡したという経験を持ち、自己保存のためには勝つ兵法を持たねばならぬことを胆に銘じていたからであろう。

景憲はその土壤の上に、かつて一新戦法を開拓した信玄や当代のすぐれた戦法について多くの指導を武田家遺臣らから受け、更に信玄の戦史中心に各種の戦争技術を説く「甲陽軍鑑」を得、まずみずから大阪の陣に参加することによって得た戦争体験からあみ出したものを織り混ぜ、それらを総合して甲州流兵法を創立したのである。したがっ

て景憲の創立したものは、いわば中世末的兵学思考法を経とし、中世末的戦闘体験を緯として編成したものであり、常に來たるべき戦闘への実践的適応を意図して新構想を企図するものではあったが、他面宿命的に中世末的残滓を多分に内蔵したのもまたやむをえぬことといふべきであらう。

甲州流兵法について、その成立・展開などの兵法学史的基礎研究は、石岡久夫氏の「日本兵法史上」（昭和四七年・雄山閣）が最もすぐれている。以下にも、兵法学史的記述の多くは該書の恩恵を受けている。石岡氏は、景憲の兵法学上の修練を次の四種に分類しておられる。即ち(1)軍配に関する各種の伝授を受けたこと、(2)信玄流の軍法に関する各種の伝授を受けたこと、(3)城取その他の伝授を受けたこと、(4)「甲陽軍鑑」を書写したこと、の四箇条がそれである。そのうち、(1)は「訓閲集」中心とする中世末的兵学体系に關することであり、(2)・(3)は信玄流を中心とする実践的軍法に關することであり、(4)は信玄を中心とする戦史やそれにまつわる戦争技術的な事項をまとめた書物の発掘に關することである。これらの主体的統合のうえで、中世末的兵法学思考法に立ちつつも実戦的には次第に変化しつつあった中世末の実戦体験に基づいて、より新しい方向をめざす兵法学体系の形成を景憲は意図しつつあったものと思われる。というのは、景憲が伝授を受けた軍配兵法は従来の小笠原家式な体系で、これは個人戦中心時代の古風なものであり、それでは処理しえぬものが戦術の変化とともに多くなっていた。集団戦時代に生きた上泉信綱や岡本半介らはそれを逐次それぞれの時代の戦闘法にかなうように改変しつつあったものと思われるが、その思潮は景憲にも同様に胚胎した。即ち、単に伝授を中心にして「訓閲集」の伝統を墨守するのではなく、主として信玄らの実践的体験や戦史等としての「甲陽軍鑑」や各種の伝授ものをもとにしてあるべきものを模索することにより、在來の兵法に適宜新風を吹きこみつつ新体系を構築することを意図したものと思われるのである。

すでに述べたように、景憲の基礎的修練時代は、彼が二四歳から二〇余年にわたって徳川家を離れて諸国を遍歴していた間のことであり、大阪の陣終結後旗本に復帰して以來ひたすら兵法学体系の充実につとめた。景憲が山鹿素行

に印可状や印可副状を授与したのは寛永一九年で、時に景憲七一歳、素行二二歳であったが、その頃景憲の兵法学の大綱は決定していたと考えられている。⁽⁴⁾以後景憲はその兵法学の具体的内容を記述した著述を逐次著述した。それは、「甲陽軍鑑拔書集、一卷」(正保二・一一)・「同拔書後集、一卷」(正保三・一一)・「同拔書武備軍要卷、一卷」・「暑到来、一卷」(慶安三・六以前)・「寒到来、一卷」(同)・「彼本、一〇卷」・「中興源記、五卷」(慶安四・六)・「此本、一卷」(万治元・一一)・「軍法巻裏書、一卷」・「甲州流軍配相伝之抄、一卷」などである。これらは甲州流諸派を通じてほぼ共通の教科書として永く使用されたものである。これらのほかにも景憲の著述とされるものを若干承知しているが、真偽のほども十分確認していないし、流儀上の理論にはほとんど関係を持たないほどのものである。

景憲の門人は、石岡氏によれば次のごとくである。即ち、正木輝雄の「兵家系図」の説くところでは、北条氏長・富永勝由・梶定良・近藤正純の四名を小幡門初一的四哲同学と名付けて最高弟とし、渡辺盛房・正木内蔵亮・跡部九郎兵衛の三名を小幡直伝三友同学と言ひ、西村義則・小早川能久・熊谷小膳・府川行貞の四名を四伝四明同学と称した。このほか景憲には杉山盛政・村上昌宣の両家臣があり、彼らには景憲が知行千五百石の中から五百石ずつを与えたと云われるが、その両名および山鹿素行なども門下の逸材である。

甲州流と各藩との関係では、本論に関係を持つものだけを抜書すると、まず景憲の本流は甥憲行に更にその女婿景豊にひき継がれ、その子孫は広島藩の甲州流兵法師範となった。なおこの系統は神谷直政によって尾州藩にも伝わった。次に、景憲の臣杉山盛政はのち桑名藩主松平定綱に仕え、子孫も代々同藩に甲州流兵法をもって仕えた。次に、景憲の学風の従順な継承者であったとされる小早川能久は讃岐高松藩主松平頼重の家臣となって甲州流兵法を祖述した。次に松山定申の系統では、その門下の服部直系が尾州家での伝流を称し、更にその門から甲州流別伝・手鑑流・甲陽的当流を名乗る者が現われる。なお石岡氏は、松山直良を流祖とする甲州古伝流があり、この直良は松山定申と同一人物であろうとされるが、家蔵の「緯糸集」の伝系からすれば、⁽⁵⁾的伝流の服部直景門の同直好(定申の孫弟子)で

あるかもしれない。その系統の岡崎康邦は甲州古伝流を称した。次に、佐々木秀乗の系統では、まず大嶺広通の門下が仙台藩に甲州流を伝え明治維新の頃まで隆盛であったし、また関和政春やその甥有沢永貞によって金沢藩に甲州流の一派が伝えられた。それらのほか八戸藩の甲州流については太田尚充氏の説がある。⁽⁶⁾即ち景憲の門人明石甚九郎為政が盛岡藩に仕え、その門人で同藩士の星合平左衛門に八戸藩士中里寛右衛正康が甲州流兵学を学んだが、それが八戸藩に甲州流を導入したもとなったとされるものである。甲州流の諸派は以上に略記したものよりは遥かに多く諸藩に行なわれたけれども、それらの細部事項については十分に明らかでないものも多く、また目下の作業に直接には関連を持たないものも多いので、それらについては省略する。

その二 「文字相伝」から「軍配文字」へ

小幡景憲は、武者言葉についてどのような用語を用い、またどのような概念規定を与えていたのであろうか、武者言葉についてまとめた指導を行っていたのであろうか、その兵法学体系の中でどのような位置を武者言葉に対して与えていたのであろうか、武者言葉集を作ったことがあったのであろうか、などのことが、私にとって大きな問題点となっている。一つには、小笠原流系の兵法を除いては、甲州流は近世に最も早く開流した流派であるためで、もし景憲に武者言葉集の伝書があれば、おそらくそれは近世における最も古い武者言葉集となるはずであり、その実態いかんは甲州流の兵法学に占める位置の重さのために、流内諸派はもちろんのこと、爾後の兵法学一般の動向に重要な影響を与えた可能性が考えられるからである。また一つには、景憲の門弟北条氏長の北条流では、氏長の伝書と考えられるものには武者言葉集はないかと思われるにもかかわらず、同じく景憲の門弟であり、実質的には氏長の門弟であると考えてもよい山鹿素行の著述には、早くから武者言葉についての記述が見られるからである。寛永一九年に七十一歳の景憲は二一歳の素行に印可状や印可副状を与えているが、この頃に景憲の兵法学の体系は定まっていたであ

ろうと考えられ、事実景憲はそれ以後甲州流の根幹となる兵法書を著述している。一方素行ではその年に最初の兵法学上の大著「兵法神武雄備集」の根幹がほとんど成立していたと言われるが、その著書にはすでに数か所にわたって武者言葉群の記述がある。素行は武者言葉についての知見を景憲から得たのか、それとも氏長から得たのか、ということとは私にとって重要な問題となっている。景憲と直接関連させて考えられるそれらの問題にどのようにして接近していくべきかに、とまどいを覚えさせられるのである。

景憲に関するそのような問題を究明するためには、景憲の兵法学に重要な影響を与え、かつ武者言葉集と関連する伝書を持つ「訓閲集」の伝授について、その実態を明らかにしておかねばならぬ。すでに「甲州流の概観」の項で、景憲の兵法上の修練を、石岡氏に従って四種に分類したが、その(1)の、軍配に関する各種の伝授を受けたこと、はほぼ「訓閲集」の伝授に關することである。本稿の主題である武者言葉との関連からは、主として「訓閲集」を中心とする軍配兵法の伝授を受けたことが最も深い関係を持つと考えられるので、まずこれについての検討に焦点を絞ることにする。

「訓閲集」を中心とする兵法学と武者言葉集との関係については、すでに述べたことがある。^⑦現存の「訓閲集」はすでに多量の改編を受けており、それらからは原型はもちろん、その後の改編のあとほとんど辿るすべもないまでに至っているが、その伝来経路については、石岡氏によれば次説が有力に行なわれていたとのことである。即ちこれは大江維時が唐から将来し、匡房が源義家に伝授し、爾後源家ゆかりの兵法学となり、のち源家一門の小笠原家に伝流したとの所説である。いずれにせよ小笠原一門では、頼氏・成隆・氏隆らが伝系に載り、そのうちことに氏隆がある時期の「訓閲集」の編成等に重要な役割を果たしたものと考えられている。石岡氏は「訓閲集」を四分類され、それらを第一類氏隆伝岡本系、第二類氏隆伝上泉系、第三類小笠原流水島系、第四類異本諸系とそれぞれ命名された。その四類中第三類は近世期のもの、第四類は各種異本の混交なので、この二類を除くと、第一類と第二類とはともに

氏隆を伝系に持っており、そのうち第二類の上泉系は、上泉信綱―秀胤―義郷という伝系、第一類の岡本系は、氏隆―信綱―秀胤―岡本半介との伝系を持つ。第一類の岡本系は第二類の上泉系を受け、それを改編したものである。それでは第一類と第二類とを比較検討して共通項を採り、それによって氏隆編の「訓閲集」に遡及できるか、というに、事実上算術的遡及はできない。それは上泉系自体常に独自の改革が進展しているためで、単純に数字の引き算のように運ばぬところに、伝授物の複雑さがうかがわれるのである。⁽⁸⁾

それでは、なぜ氏隆時代の「訓閲集」の摘出を望むのかというに、第二類の上泉系には伝書「文字相伝」があり、それが武者言葉集の萌芽的形態を具えていることと、別に氏隆伝「小笠原家百二十字之事」という伝書があり、両者にある種の共通の精神が認められ、そのため上泉系の「文字相伝」は氏隆に始まる可能性が考えられるからである。また別に京都小笠原家の政清伝「訓閲集」には「文字巻」があり、また別に同家の伝書と思われるものに「万言様之事」があり、それには武者言葉についてのまとまった記述がある。氏隆系は「訓閲集」を中心に兵法関係の伝授に当たり、武家礼式の伝授に当たった小笠原家のある群の人びととは、学問上別系統には属するが、一門内ではそのような学問系列を越えて伝授ごとについての情報交換はなされたかと思われる。それで武家礼式家系の「文字巻」や「万言様之事」と氏隆系との間に伝授関係のある可能性も考えておかねばならぬし、ありえないことではない。

上泉系の「訓閲集」には直系と別系とがあり、直系にのみ「文字相伝」が見られることからして、目下のところ、私は「文字相伝」はある時期の上泉系に始まるものと考えてるが、氏隆伝の「小笠原家百二十字之事」との関係については別の機会に詳述したく、今はただ「文字相伝」と「百二十字之事」とには直接関係は認められないことを言うにとどめる。また「文字相伝」と「万言様之事」との間にも、直接的な影響関係は考えにくいとのみ述べておく。

ところで、景憲は「訓閲集」を中心とする軍配兵法について伝授を受けたわけであるが、その軍配思想については石岡氏の解説を援用すれば、「軍配の思想は平安朝以来中世期を通じて流行した天文気象による吉凶の判断、中国の

陰陽五行の思想、十干十二支の組合わせ等による日時・方位の善悪が、日常生活ばかりでなく、軍陣の成敗に影響することから案出された思想である。この関係から軍配は軍敗とも称せられ、軍配兵法が起ったのである」ということになる。景憲は主として岡本半介からこの思想を受けた。また景憲の兵法思想を、軍配・軍法・築城観・戦法理念の四種に分類し、「軍配は軍法の助となるものとし、主体性を軍法に置いたのである。換言すれば、天の時よりも人の問題に重きを置いたといえる」と杉山公憲の「軍鑑挙要」の「天官巻」に関して述べるとともに、その思想は景憲に発するものであろうと、同じく石岡氏は述べておられる。景憲が岡本半介その他から軍配に関する伝授を受けたことに關して、どのような明証があるのか、というに、石岡氏によれば、まず次のようなものが認められる。即ち、(ア)「軍配拔書」(および景憲の高弟小早川能久の「翁物語後集」)の記事、(イ)上泉系の「要務集伝来聞書」の記事、(ウ)小早川能久著「翁物語集」の記事、(エ)「信玄全集末書」の記事、などが挙げられる。石岡氏はそれらに基づいて、「景憲は文祿四年(一五九五)、徳川家を浪人してから諸国遍歴の旅に出で、中世以後天文雲気による日取方取等の軍配術を主体とする兵法に留意し、元和四年(一六一八)に至る二十数年間に亘り、当時の著名な軍配兵法家について研究したことが知られる」と述べておられる。その軍配兵法家としては、雨宮半兵衛・判兵庫助・上泉義郷・岡本宣就・広瀬景房・益田秀成・赤沢太郎左衛門等の名を挙げておられる。

それらの軍配兵法家から景憲の受けた伝授は多くは断片的事項についての伝授であろうと思われるが、体系的伝授をなしたものとしては、上泉流の上泉義郷と岡本半介とが挙げられる。しかしそれらの資料における記述の示すところでは、景憲が軍配兵法について断片的伝授を受けたことを主として記述するにとどまり、ある種のまとまった量の伝授とか体系的伝授とかを受けたとは、ほとんど述べていない。

しかし上泉流について言えば、「要務集」や「大星初段」などと上泉流にとって枢要部を占める事項の伝授を受けたり、「訓閲集」の一部に当たるものの伝授を受けたりしたとするからには、上泉流兵法にとってはそれらより一層

基層的な体系とも言うべき「訓閲集」の体系的指導をも受けた可能性も考えねばならない。

景憲が岡本半介から「訓閲集」の指導を受けたことは明らかである。寛永十九年に山鹿素行に与えた印可副状の中で、「愚老嘗從岡本半介、方雖伝写訓閲集一部、逐一不究其学」と述べている。これでは「訓閲集」の一部を伝写したまでで、その学を十分究めてはいなかった、と述べているわけである。普通この種の伝授物の指導においては、その全体系の中をいくつかの群に分け、易から難へというふうに順序を立てて指導を行ない、ある種のまとまった指導を行なったあと、ときには全体系の指導を行なったあとで、それらの伝書の書写を許されたり、もしくはその伝書を一種の免許状の形で授与されたりするものである。したがってこのばあい、景憲の言を信じれば、「訓閲集」の一部のみについて修学した、との意とも解される。もちろん、これを景憲の謙退の辞とも解しうる。今、金沢市立図書館加越能文庫に岡本系「訓閲集」一八冊本が残存している。これには岡本半介石上宣就—小幡勘兵衛縄直の伝系が記されてある。元禄三年における有沢永貞の自筆である。縄直は景憲の初名である。これは本来残闕本であり、もともと全体系本がそろっていたことも考えられ、景憲が全伝書の伝授を受けたとも考えられる。もっとも有沢永貞の著「枢密要論」には「佐々木（秀乗）カ許ニ伝来シテ和朝ノ古伝軍書ノ最初訓閲集アリ是亦庚午ノ春我ニ伝之」とある。庚午は元禄三年で、現存本を永貞が自写した年に当たるといえる。即ち景憲—秀乗—永貞の系列で永貞の書写したものであろう。そのように考えれば、現存のものは残闕本ではなく、景憲が「訓閲集」の一部を書写したと述べたのが、この一八冊に相当するのであるかも知れない。

今この「訓閲集」の伝授関係に私が執着するのは、第一に、上泉系には伝書「文字相伝」が含まれ、岡本系には伝書「軍配文字」が含まれ、ともに武者言葉の萌芽の形態を具えていることと、第二に、「文字相伝」と「軍配文字」との関係では、「文字相伝」を増補編纂したものが「軍配文字」である、という相互関係にあることのためである。つまり、景憲は「文字相伝」を伝授されたのか、それとも「軍配文字」を伝授されたのか、あるいは両者を伝授され

たのか、あるいは両者ともに伝授されなかったのか、ということの問題視しているのである。

景憲が上泉系の「訓閲集」の一部の伝授を受けたことは明らかである。しかし一部の伝書名を具体的に絞って、上泉系の「文字相伝」の伝授を受けた明証があるのか、となると、明証はない。しかし岡本系の「軍配文字」については、金沢市立図書館の加越能文庫の「訓閲集」(元禄三年有沢永貞筆)の「軍配文字」の伝系に「小幡勘兵衛繩直」の名が載っているし、それが右述のように小幡景憲―佐々木秀乗―有沢永貞へと実質的に伝写されたものであるなら、一層そのことは明白である。

「文字相伝」と上泉流兵法との関係やその本文の復刻等については、既に述べたことがあるので、なるべく繰り返さないことにしたい。私の考えでは、「文字相伝」の史的意義は、兵法学の体系的伝書の中に、直接的には戦闘行為には関係を持たないような文字指導についての伝書を導入したことにある。この文字表記の指導に関する伝書の導入は、やがて次の段階では語彙指導としての武者言葉の導入の契機となり、漸次兵法学における言語的要素の侵入へ道を開くことになるわけである。ただ近距離的には、「文字相伝」の直接の発展的継承が岡本系の「軍配文字」であり、この両伝書の主題はあくまでも文字表記の指導にある。それは中世武家階層一般に書記能力が劣っていたためであるが、武者言葉は現実的に使用語彙であってその能力はすぐれている、という実情を反映するものであろうか、「軍配文字」では、文字表記に関連して附帯的に語彙の若干に言及するという形で、語彙指導への萌芽的要素を胚胎しており、その意味では次代への基礎的土壌作りが始められていたといえることができる。もちろん兵法学内での試みをすべて単純にその時代の言語的実態の反映ということとで理解することは正しくないが、近世期には表記能力の一般的上につれて文字表記の指導を主題とする必然性も喪失し、むしろ武者言葉が現実的に使用語彙ではなくなったことへの投影として、忘れられた語彙の学的指導への必要性が認識せられ、武者言葉集の大量生産をもたらすことになった。これとは別に、「文字相伝」と同様に兵法伝書の一つとして文字に関する指導を行なったものに氏隆伝「小笠

原百廿字之事」がある。本伝書も本来は氏隆伝「訓閲集」中の一伝書として著述されたものであったかもしれないが、現存の形態からはその明証は得られず、またそれを発展的に継承する伝書も現在のところ発見することができない。それが後世に与えた影響はほとんど認められず、武者言葉へ道を開いたけはいもまた認められない。そのように「文字相伝」と「小笠原百廿字之事」とでは、武者言葉集の歴史の中で占める位置に大差が認められるように、「文字相伝」によって文字表記の指導に関する伝書を「訓閲集」の伝書体系に導入したことや、やがては語彙指導の伝書としての武者言葉の導入の契機となったわけであり、それは近世兵法学の体系の中に言語的要素を導入することによって、他の軍礼的要素とあいまって、近世兵法学を単純に戦闘のための理論体系に終始せしめずして、これをより人間学的な哲学体系へと赴かせる契機となったと言えるのである。

「文字相伝」の本文に即して伝書の著作者の意図した文字指導の内容を具体的に検討してみよう。「殿」をシッパライ・シンガリと訓じるのは、兵法用漢字について正しい漢字訓を指導するもの（シッパライは初出例か）、「兵呼」をアイジルシと訓じるのは、兵法用漢字のうち宛字式表記法について、字意からする宛字を挙例したもの。「箭」をススムと訓じるのは、しいて神功皇后の三韓出兵の故事に語源を求めるいわゆる故事附けの例であるとともに、味方の箭は敵に向かつてススムと読み、逆に、敵の矢はススマぬというふうに、敵と味方とで用語を異にする用法を根底に持つ戦場用武者言葉と言語意識を共通にするものについてその文字的側面を述べたもの。「動」の訓では、それをウゴク・ハタラクと訓じるのは通常の用法であるが、それをカツ・ノブルなどと訓じるのは、漢字の兵法用訓法として、通常の訓法から飛躍的連想的に発展したもので、戦闘行為を常に味方の勝利に直結しようとの祈念的意識の反映である。最後に敵将の名字を書くときには、その漢字の首をはねたような形に書け、というのは一種の呪術的方法である。

上泉系の「文字相伝」の発展的継承が岡本系の「軍配文字」である。そのことは、両者の記述様式・記述内容を比

較すると、容易に判定できる。「文字相伝」の文首と文尾とを存し、その間に大きく増補する形式によって「軍配文字」は成立しているし、内容的にも「軍配文字」は、神功皇后の故事の記述も増補・整備し、続く漢字の配列もある種の編集意図で同様に増補・整備したあとが認められる。また「文字相伝」の主題が兵法上の文字指導にあったように、「軍配文字」の主題も同様に文字指導にあった。ただ後者の特異点の第一は、武器・兵具・物具・戦具について、その用語を多く挙げ、その正書法を示すとともに、その用語の分類名を添え、更に別に「狼煙・斥候」などの戦場用具・人的構成についての用語・用字に触れることである。漢字指導を契機として兵法用語の指導にも言及するわけでは、これは次代の武者言葉集の中に兵法学用語が包含されることへの先鞭と考えられる。特異点の第二は、「銀胃・電変・韜」などの武器部分の用字の解説に関するものである。これらは本来和語であり、和語としての兵器用語の漢字表記にどのような漢字を用いるかの選択にあたって、「銀胃」は銀星を四形におくので「銀」の字を用いて「白」の字を用いないとか、「幕合戦ノ時氣変発シテ電光ノ如シ」であり、それで甲の頂上には「電変」の字を書くなど、民間語源説や故事付けなどの解釈のもとに、なるべく縁起のよい漢字を使用しようとする。この縁起のよいものを重んじるという考え方は中世以来の伝統的なものであるが、それらが武器用語を摘出しながら問題にされる点に、語彙への関心の深まりが感じさせられる。第三に、同じく和語の兵器語についての漢字表記の選択において、漢字の意味などを踏まえて、忌詞的思考法に基づいて縁起のよい漢字を使用しようとするものがある。「去死」は、和語の音と漢字音とを一致させ、その上意味の「去死」ということへの祈りを籠めてこの表記を選んだものであろうし、鎧の袖を「祖伝」とするのも「軍神二三祖ノ神明有、之ヨリ伝テ敵ノ利刃ヲ防」ぐためであり、鎧の板を「威多」とするのもこれらと類を同じくする。

「軍配文字」の内容を武者言葉との関係から用語面を中心に考察すると、この用語には次の各種が挙げられている。第一に、武器・兵具・物具・戦具などの兵器用語をその分類名とともに挙げており、更に「斥候・間諜」などの戦場用

員用語や「狼煙^{ろうえん}」などの戦場用語が挙げられている。第二に、「御乗馬(略)ススムル」などのように指揮者などの身分に応じる用語が挙げられている。第三に、味方の箭はススムと訓じたり、敵の幕は引くというように、敵・味方によって用語を変え、味方にはよしなに言い、敵にはあしざまに言うように敵・味方で使い分ける用語を持つことがある。これは次代の武者言葉集の内容と直接的な関連を持っている。

「文字相伝」と「軍配文字」との差違点は、右に挙げた特異点の様なものだけかというに、そうとはかりは言えない。根本的理念に差がある。「文字相伝」では、文首の「箭^{やぶ}」の訓の故事付けと味方の事柄をよしなに言うという精神と、敵将の名字は首を刎ねたように書くということに見られる呪術的要素とが最も根幹にあり、この伝書の主題が全く文字指導にあることとともに、これは全く中世末的要素に充ちた伝書であると言える。それに対し、「軍配文字」では、用字の指示にも客観的に記述しようとの意識が認められ、故事付けなどの解説の中にもより合理的に解説しようとの精神の表われが認められるなど、伝書を貫く理念の中により近世的な要素が認められるのである。それは岡本半介における変革的精神の表われであると言ってよいのであろう。小幡景憲は「軍配文字」から、どのような変革的精神を受けとり、それからどのような自己改革を体験したのであろうか。

武者言葉集が、各流兵法学体系の中でどのような位置を占めるのか、を考えるに先だって、岡本系「訓閲集」の体系の中で「軍配文字」がどのような位置にあるかを、あらかじめ考えておきたい。岡本系の「訓閲集」八五巻について、石岡氏はそのうち一一巻は「兵法秘術一卷書」の混入したものとし、これを除いた残りを天官・人事・製器の三項に分類される。その分類に従うと、「天官」は主として軍事に関する日取りの類と雲気を相して勝敗等を占う術とに関するものであり、「制器」は扇・磨・幕・旗・六具・兵具・団・策等の軍器に関するものである。これは主として指揮者に関する用具で、刀槍等の武士の戦闘用具には言い及ばない。つまり、後世の戦術論からすれば、戦争用具の優劣が勝敗の重要な要因となるし、これが同時に戦術をも規定するが、当時は刀槍による個人技中心であったため

に一般兵器論は未発達であり、兵法学では将師用の指揮用具中心の論だけがなされていたわけである。「人事」には、城取り・首実検・出陣・出陣祈念・陣取り・斥候等が含まれる。即ち出陣から戦場のかけひきに至る諸事項が含まれるが、この中に「軍配文字」が含まれている。近世では、首実検・出陣祝・武者言葉などは軍礼の項に納められるが、その萌芽がこの「人事」の項にあるわけである。「人事」の項は、一軍の将が出陣して戦場に臨み、軍を指揮する上での諸事項を含むと考えてよい。近世における兵法各流の戦術論と軍礼論との中心がこの「人事」にあたると言えるわけである。

近世の兵法学各流の体系を戦術論・指揮用器論（兵器論）・軍礼論の三種に下位区分し、軍礼論のあることをもって近世日本兵法学の特徴と解したいというのが、私の素人考えであるが、その軍礼論の中に武者言葉論を中心とする言語技術論が含まれると考えている。もっとも軍礼の用語の起源とか武家礼式家との影響関係とかこの用語の使用の有無と兵法学各流との関係とかについては、十分整理を行っていない。岡本系「訓閲集」では、発向巻・肴組大事・軍配文字・実検巻・頸祭大事切紙・頸祭返極秘がこれにあたり、ほぼこれに当たるものが近世に継承される。

我われの意識からすれば、「軍配文字」による文字表記の指導は、城取り・陣取り・斥候などの戦争技術とは本質的に性格を異にするものと思われる。にもかかわらずこの「訓閲集」では等しく「人事」の中の伝書として対等に扱われていることは、我われにとつてはいぶかしい現象で、著しく不審感をそそられる。しかし中世人にとってそれはさして不可思議なことではなかったのであろう。出陣に先だつて行なう出陣祈願の行事の肴組に考慮を払い、それによって勝敗を占い、勝利を祈願する思考法と、戦闘関係の用字に勝利の祈願をこめるのでは、根源的に共通する精神の作動が見られる。しかもそれは単なる祈りに終始するものとして祈るのではなく、祈ることは言霊の活動によって祈りの実現となつて祈り手に帰属すると期待されている。「軍配文字」による文字表記は本来そのような中世人における素朴な宗教的精神に基づいて敬虔に行なわれたものと思われ、それはやはり戦闘行為の一種とみなされるべき

ものであったのであろう。

「天官」は軍事に関する日取とか雲気を相して勝敗を占う術に関するもので、指揮者の心得るべき戦争技術の指導の一部である。「人事」も出陣祈念・城取り・首実検など指揮者の心得るべき戦争技術の一端である。「制器」も扇・団など指揮者の指揮用具を主として論じるもので、指揮者のための戦争技術の一部を述べたものである。そのように「訓閲集」は本来指揮者のための兵法学体系であったし、したがって武者言葉の萌芽と目する「文字相伝」や「軍配文字」も本来主として指揮者を対象として編纂されたものであろうと思われる。ただ明らかに岡本半介によって増補された語彙に関するものには、「大将ノ御陣屋」とか「御乗馬」とかについて述べる件があり、やや下層者に対する現実の指導の反映と思われる。そこに岡本半介の伝書の過渡的形態が考えられる。

というのは、近世の兵法学各流派では、各種の武士階層を広く指導の対象とし、その代わりに受講者の身分の如何によって、若干受講項目等に差を付ける方式を一般に採用した。同時に近世の兵法学では、武士の身分に応じて心得るべき兵法上の知識に差違を与えた。その風潮にのって平士の心得るべきものを説いた「一騎武者受用之巻」のごとき伝書がいくつも著述されたわけである。武者言葉について言えば、素行の「武教全書」では下級武士の心得るべき軍礼上の知識とされた。そのことは要門流の「武者言葉大概」の要門流兵法学体系上の位置についても類を同じくする。それは武者言葉に期待するものが変化した結果である。そのような歴史的変化からしても、岡本系の「軍配文字」の中に過渡の様相を認めることができるのである。

その三 小幡景憲の武者言葉集——杉山公憲の「軍鑑摘要」を経由して——

(一) 景憲の伝書

景憲の兵法学上の主著は、既述のごとく「甲陽軍鑑拔書前集」を初めとする十種の伝書であり、これらをもって甲

州流兵法学の基本的伝書とする。景憲兵学は、建学の当初は学的性格が曖昧であり、そのうち次第に学的に整備充実されたものと考えられるし、また景憲以後にはその整備充実が一層進行し、それに伴い抛り所とする兵法理念等のいかに因って諸派に分派し、中には甲州流より分離独立することを標榜するものまで現われた。それらを通じて、甲州流の流派上の範囲を何を基準にして決定するかは、それら諸派が甲州本伝流とか信玄流とか甲陽的当流とかと甲州流ゆかりの名称を使用するか否かとか、あるいは古伝流や手鑑流などの別系の名称を使用するか否かなどによって、定めがたい。流派名の決定には政策のからむばあいがあるからである。むしろ景憲直伝のそれらの伝書を講読伝授する指導課程を持つか否かによって決すべきで、たとえば岡崎康邦のごとく、本来は甲州流を学ぶ者であっても、すでに異を立て「先師以来の伝書を廃棄して自著をもって伝書とし、流名さえも別名を称した」ものは、たとえ兵法理念上共通の要素を持っていたとしても、厳密には甲州流から除く、というふうに取り計らった方がよからうと思うのである。

「訓閲集」の伝承に関して、上泉系や岡本系に革新的気運があり、景憲もそのような進歩的兵法学者に見られた革新的な精神風土を早くも十分体感していたであろう、と初めに述べた。しかしそれはあくまでも可能性の問題であって、必然性の問題ではない。景憲兵学の建学の当初その学的性格が曖昧であったといったのは、自己の兵学をどのような理念によって展開させるかについて、景憲の考えが十分に確乎したものではなく、兵法学体系の見通しも必ずしも明確ではなく、もろもろの点において明確でないことが多かったろうことを言っているのである。寛永一九年七十一歳の景憲は二一歳の素行に印可状・印可副状を与えており、その頃には甲州流の兵法学理論の大綱も定まっていたろうと言われる。この時、素行はすでに大部の書「兵法神武雄備集」の大体の理論体系を成就していたとされるし、またそれより早く寛永一二年に北条氏長は「兵法師鑑抄」の体系を完成させて景憲を驚かせている。景憲が甲州流の中心となる伝書群を著述するのは、まさに門弟兩人のそれらの著述に遅れること数年の後のことである。その意味で

は、論理的思考力の点では、景憲は北条氏長や山鹿素行に及ばないし、その及ばないことが景憲の氏長に対する不快の原因となり、両人の不和のもととなったものと考えられている。

景憲がいつ流派意識を確立して甲州流の開流を決意したか、明らかでない。おそらく近世初頭には、兵法に流派という意識は見られなかったのではあるまいか。武家礼式としての小笠原流や伊勢流のことは言うまでもなく、芸能関係一般に流派とか家元とかが問題にされるのは、かなりのちのことである。兵法のような学門の世界では、一層そうであろう。流派を立てることが自己擁護の手段になり、経済的生活に関連を持つことになって初めてそれは必要性を持つ。兵法学に流派が生じたとすれば兵法講義を職とする者の発生に伴うものであるが、近世初期の武家社会ではそうなるには暫く時を必要としたであろう。もちろん学的未分化が一層それを要請しなかったことであろう。

近世初頭には、世は泰平に赴きつつあるものの、戦乱への危険性が全く解消したわけではなく、また従前の戦争体験者が巷にあふれており、武ばったことが一般に重要視された。軍記の形式による戦史物が多量に生産され、それらの産業予備軍として武士たちが武辺咄・夜咄などと称して戦闘体験とか戦闘のための教養談にふけたことは「武辺咄聞書」などでその実態を把握できるが、それらは他の時代の説話とは様式・題材等について特殊性を持つものの¹⁰で、近世初頭における説話文学として文学史上に一つの座席を与えるべきだと提言したことがある。そのような時代的風潮を受けて、巷間に兵学講談の類がしきりに行なわれ、軍学者をもって自任する者が巷にあふれるという世情になっていったと思われる。素行の「配所残筆」に次の記事がある。

村上宗古老、我等別て申談候事、各存知候通候。拙者方へ御出候時分被_レ仰候は、我等事わかき時分より物之師を取誓詞仕候事無_レ之候。殊更武芸などは人にまして習候者に無_レ之候。世上軍法者多候得共、師を仕候者我等所へ参候て軍法咄仕候へ共、我等尤と存候者無_レ之候。此段は渡辺睡庵と昼夜咄候て、古来より軍法弓矢咄、毎度聞き候故と存候。然に近年其方に逢候て、軍法兵学之咄、評判詮議を仕候に、毎度驚_レ耳候。睡庵事は渡奉公人に

近代稀成武士と存候。然共軍学兵法之議論被_レ仕候はゞ其方前にて睡庵口の明可_レ申候様にて不_レ被_レ存候。就_レ其
 当年五十三歳、老学恥入候得共、今日初て誓詞仕、其方兵学之弟子に成申度候由（略）

また近世初期に何流とも流儀を定めぬ兵法書が多産され、「軍鑑独歩集」「兵法之書」（鍋島少輔信澄、九冊）など多数が
 現存しているのも、右のような世風の残滓というべきであろう。

元和元年に大阪夏の陣が終結して、景憲は徳川家に帰参し、元和七年に北条氏長が一三歳にして入門し、同年毛利
 宰相秀元に元和七年本「甲陽軍鑑」を進上している。「甲陽軍鑑」進上の件は、景憲の研究が世上に喧伝されたため
 あるべく、事実景憲所有の「甲陽軍鑑」を諸名士の書写したことも多く、また版本についても、現存の明暦版・万治
 版などのほかにも寛永版・寛文版等の刊行のあったことについての諸説も行なわれるほどであるが、それらの刊行に
 は景憲の協力を得て初めて可能であったことは言うまでもない。「甲陽軍鑑」の刊行は「信長記」「太閤記」などの英
 雄中心の戦史物刊行の流れの中でなされたし、より巨視的には中世以来の各種戦史物著述の流れの中で著述されたも
 のであり、それをめぐる研究的刊行物には寛文十年の書籍目録によると、すでに「甲陽軍鑑管見抄」（馬場道誉、一九冊）
 ・「甲陽軍鑑評判」（伊南芳通、承応二年刊、一〇冊）・「甲陽軍鑑評判奥儀抄」（三五冊）などが載せられてある。ことに
 「甲陽軍鑑評判」のごときは、景憲の伝書のうち、「彼書（彼本）」（慶安三・四年）よりはおそく「此書（此本）」（万治
 元年）より早い時期に刊行されている。それをもってしても、「甲陽軍鑑」がいかに強く世の注目を浴びていたかを知
 ることができる。

そのような「甲陽軍鑑」の書写・刊行・研究等の盛行をもってただちに景憲兵学の浮上に直結することは正しくな
 いであろう。景憲は、三科伝右衛門・広瀬美濃守・早川弥三左衛門から信玄流の陣法・軍法・城取などの部分的な戦
 法についての伝授を受けるといったことによって、ある種の戦闘技術についての断片的知識を持っていたけれども、
 それらを一定の理念のもとに兵法学に組織づけることを当初から意識していたかは、甚だ疑わしい。景憲の伝書から

は、それはほとんど感得できない。景憲兵学は、まずその断片的知識に基づいて「甲陽軍鑑」を素材として講読することから始められたものと思われる。そして「軍鑑独歩集」「兵法之書」などがそうであるように、断片的知識の深化と拡大とがまず求められ、景憲兵学はそのような要請に応ずるものとして成長していったものであろうが、そのうちそれら断片的知識の理論的統一が求められるようになり、北条氏長や山鹿素行はそれをなした。景憲は量的拡大にとどまったのではないかと思われる。ただ景憲は「訓閲集」における兵法学体系を岡本半介を介して承知していた。したがって十種の伝書には実現されていないが、「訓閲集」の体系を基盤にした一つの体系が景憲兵学の深層構造として存在していたことは、考慮しておかねばならぬであろう。

兵法学の体系との関係から言えば、北条氏長の北条流では、寛永一二年に「兵法師鑑抄」の体系が完成し、それは更に寛永一六年に鍊成されて「雄鑑抄」になり、更にまた正保二年には「兵法雄鑑」に至って北条流の体系が完成する。以後その簡約本として将軍献上用に「結要士鑑」が成立し、一般士人用に「士鑑用法」が成立する。ほかに部分的事項を対象とする「由利安牟攻城伝・一步集・乙中甲伝・城取離格問答」等が著述された。即ちまず兵法学体系の鍊成がなされ、その完成後教科書や単元学習書の著作がなされたわけである。そのことは山鹿素行や要門流の沢崎景英その他にも等しく認められ、論理的思考力にたけた流祖が自己の学的体系を建立するさいに見られる一つの類型である。景憲兵学は、これらとは展開の相を異にするわけである。

景憲の伝書には「甲陽軍鑑拔書前集」とか「甲陽軍鑑拔書武備軍要巻」などと「甲陽軍鑑」からの抜書であることを標榜するものがある。そのことは、その兵法学上の特徴が「甲陽軍鑑」の研究にあることを示唆するとともに、兵法上の理想像が究極的に信玄のその再現にあることを示唆しているが、一方その過程で「甲陽軍鑑」に見られる兵法上の部分的技法の摘出がなされたことを示唆している。その技法の抜書でも、たとえば備立が「前集」にも「後集」にもその他にも見られるというふうで、十分体系的組織的な抜書にはなっていない。それは、言ってみれば、単元学

習的技法を「甲陽軍鑑」から抜書するうちに、それぞれの伝書が成立し、それらの伝書を反復講義するうち次第に講義内容が深化し拡大していったという事情が推察され、景憲兵学の整備充実の情勢が推察されるのである。しかし一面景憲兵学の理念とか体系とかといった学問の基本的構造が十分鮮明にされているわけではなく、したがって景憲兵学の本質は何か、それはどのような経過によって変遷しながら自己確立したか、などのことは、現段階では兵法学史家にも十分鮮明にされているとは言えない状態にあると見受けられる。

(二) 杉山公憲の「軍鑑挙要」

景憲兵学の展開を知るには、杉山八蔵公憲の伝書「軍鑑挙要」が重要な鍵を持つ。公憲の父八蔵盛政は、村上昌宣とともに、景憲の壮年時代以来の股肱の臣で、のち景憲が家禄千五百石を与えられたとき、それを三分して兩名に五百石ずつを与えたという。兩名はまた兵法上の弟子でもあった。盛政は、寛永一〇年五〇歳の時景憲より免許皆伝を受け、またのち桑名藩主松平定綱に仕えた。八蔵公憲は盛政の嗣子で、万治元年一五歳の時景憲より印可状を与えられ、直系の嗣子のない景憲によって「景憲又憐_レ余猶_レ過_ニ盛政_一」と自記するように愛され、景憲兵学の学統を嗣ぐ者として信頼された。杉山家は以後代々松平家において甲州流兵法学的伝の兵法家として杉山系の学統を守った。景憲は元和五年に「武功之巻」「合戦巻」「築城巻」の伝書を著作し、それを寛永一〇年に盛政に免許している。これらの伝書を盛政以外にも伝授したかは、定かでなく、またその伝書は現存しない。ただこの三伝書は景憲の最も早い著作として注意される。

一般に兵法学の講義では、後世の体系も定まり伝書も固定した時代には、入門して講義の開始される時、師匠から教科書が支給され、それに基づいて逐次講義が進展した。しかし兵法学でも武家礼式などでも、建学初期の、体系はいうまでもなく単元学習の指導内容もまだ十分一定しない段階では、まず指導案に基づく講義が集中的に一組分実施され、終了後受講ノートの整理提出を命ぜられ、誤解・曲解・未解など有無の調査、誤解事項の訂正などを経て、ノ

ト返却のうえ、免許状の下附があるという順序になることが多い。そのばあい提出ノートが聞書を形成するわけであり、時には変身して伝書に昇格することもあると思われる。そのような意味で、杉山公憲の「軍鑑挙要」一一部二二六冊はきわめて重要な役割を担うものである。

「軍鑑挙要」は杉山公憲が主君桑名藩主松平定重の命によって延宝八庚申曆仲冬十九日に師景憲の兵法学の始終を聞書に基づいて詳説し献上したものである。その内容は、「甲州流軍書目録」によれば、左のごとくである。

甲州流軍書 六〇冊

軍鑑挙要——武道之部（二三冊）・軍法之部（一九冊）・城取之部（三一冊）・攻戦之部（二一冊）・小勇之部（一六冊）・非常之部（四冊）・天官之部（一九冊）・秘事之部（二三冊）・兵器之部（四二冊）・雑之部（一九冊）・故実之部（一九冊） 計二二六冊

これが景憲兵学の指導体系をなすものであろう。「軍鑑挙要」の成立については、その奥書に次のように述べてある。

右者甲陽軍鑑の奥規秘決の処本書に省闕して是をのせす 切れて見へすと記す 故に僕先師の聞書を以て類をわかし全部して軍鑑挙要と号す 此書を能く得心するときは軍鑑の深理に至るへし 猶書にあらわしかたき所口伝也（略）

右の文意はこういうことであろうか。即ち、以上の一一部とその細部の事項とは「甲陽軍鑑」の奥義秘決というべき事項であるが、「軍法巻」下巻の奥書に、

天正五年丁丑極月廿四日 高坂弾正書之右

五分一はきれてすたる 残るをよく見て本のこたく小身の愚人尾畑勘兵衛 元和七年六月是を写置なり

とあるように、景憲入手の「甲陽軍鑑」は入手当時すでに相当欠損した部分があったと考えられる。したがって現存

の元和七年本について研讃してもその本意を尽せぬうらみが残る。それで私は先師景憲の講義の聞書を整理し、一一類に分類し、それぞれを更に細目に分け、それぞれの項目に先師よりの聞書をことごとく所載し、「軍鑑挙要」と名づけた。表題のごとく、「甲陽軍鑑」の要訣を挙げるものとの意であり、本書を能く把握すれば「甲陽軍鑑」の深理に到達することができる。なお本伝書に書きにくいことは、口伝によって示すものとする。

右の「軍書目録」を編集した意図は、元和七年本の「甲陽軍鑑」の進上に際し、その書の貴重なことについて、

甲陽軍鑑同中巻ハ先年焼失して正本なし 此一部並加州に一部 薩州に一部 浅野家の臣近藤氏に一部 四部の外類本なし 小幡氏家伝の正本也 世に板行の書多しといへとも相違多して用ひかたし

と述べ、つづいて景憲の伝書を「甲陽軍鑑」の研究書もしくは研究のための心読の書として、「寒到来暑到来・前集後集・武備軍要之巻・彼本此本・軍配拔書・板書一卷・(太閤記)・中興源記」と挙げ、更にそのあとで、「軍鑑挙要」の件を挙げる。要するに、元和七年本「甲陽軍鑑」について、その研鑽のための参考資料として、第一に景憲の伝書群を挙げ、第二にそれらの伝書群以外の資料として、公憲が景憲の講義を聞き取ったものを残らず一一部に分類し細分類し詳述したものを「軍鑑挙要」と名付けて提示する、これらのすべては先師景憲の「甲陽軍鑑」研究の集大成である、ということなのであらう。

おそろく景憲は当時における「甲陽軍鑑」研究の第一人者として誰しも容認するところであつたらうから、「甲陽軍鑑」の初期の刊行には常になにほどこ関与するところがあつたものと予想される。ところで「甲陽軍鑑」の本文研究の一つとして、現存初期刊本を中心とする石岡氏の調査によると、上述の元和七年本と明暦版本と万治版本との本文の間に注目すべき差違点の認められるものがある。即ち品第十六の本文部において、元和本に記述のない「弓箭之巻(四三ヶ条)」「能之次第(二九ヶ条)」「鞆之次第(一一〇ヶ条)」の三項目が明暦版本および万治版本に加わっており、更に元和本および明暦版本にない「軍配扇の事」(表題欠)「采配造作法」「鞭造作法」「扇造作法」「頃之事」「押

太鼓・寸法模様之事・小太鼓」の六項目が万治本に加わっている。即ち元和本には三項目・六項目ともに欠き、明暦版本には三項目が加わり、万治版本には三項目・六項目ともに加わるという体裁になる。明暦版本や万治版本の増加三項目には、そのあとに「天正三年乙亥六月日 高坂彈正書之」との書き添えがあるが、万治版本増加の六項目のあとにはそれに相当する書き添えが見られない。その書き添えに従えば、明暦版本は増加分を持つ別本によって刊行されたことになり、万治版本はそれにさらに増加して刊行されたことになり、それらの増加分を持たない元和本は杉山公憲の述べるように通行本とは別種の貴本であり、またある種の部分において本文に省闕部を持つ一本ということになるかも知れない。しかし増加の有無を中心にすれば、景憲所持の元和本は古形を存するもので、これには本来増加の三項目および六項目に該当する記事はなかったものであり、のち明暦版本の刊行の際三項が何らかの事情によって増加され、更に万治版本の刊行の際六項目が同じく増加されたもの、と考えるのが穏当であろう。

右の三項目および六項目の増加本については、その項目名・内容等からある種の作業前予想のごときものを持つことができる。まず増加三項目分では、弓箭・能・鞠のような武家礼式の伝書とおぼしきものを内容とすることに關してである。即ち「甲陽軍鑑」の記事は主として信玄を中心とする戦史物をその内容とし、若干それ以外の記事を含むが、さりとて戦闘技術の部分的知識から大きく逸脱するようなことはほとんどない。しかるに、弓箭・能・鞠に関する部分は上中流武家の平常時の日常生活における教養的指導に関するものであり、「甲陽軍鑑」の主潮の記事とはあく趣を異にする。その本文の中には主人公の日常生活の記述に関連して鞠などの記事が断片的に挿入されることはありえようが、それらの事項を主たる対象として記述するということは、「甲陽軍鑑」の主題とは本来無縁のことと思われる。

次に注意される点は項目名の名称で、明暦版本の増加三項目は「弓箭之巻」「能之次第」「鞠之次第」で、この「一之巻」「一之次第」という名称は小笠原流などの武家礼式の伝書名に多い形式である。もっともこの三項目はその提

出方法にも若干問題があつて、三項目を並立的に提出するのではなく、弓箭を一組にし、能と鞠とを一組にし、都合二組にして提出するという方法を取る。そのため、これら三項目の本文の前には内容目次相当の記事があつて、その本文部の内容を簡条書に挙げるが、「弓箭之巻」は項目名・目次・本文の順で配列され、目次の簡条書のあとに「四十三ヶ条」と内容部の簡条数とを挙げる。それに對し能と鞠とは一括してあり、両者の目次を並立して挙げ、簡条数も兩者合して「三十九ヶ条」とし、以下本文部も兩者を並立する形式になる。目次に本文内容を簡条書に挙げるように、本文部でも記事内容はきわめて簡単に略記してあるが、これもまた中世末近世初頭の伝授物に多い形式で、口伝による実地指導を中心とし伝書にはその荒筋を書きしるすにとどめるためであり、それはまた指導内容が實地に生活場面で反復体験できるからであらうと思われ、その簡条が免許の内容に相当すると言える。即ち、明暦版本の増加三項目は、項目名・簡条数表示および素材の種類や略記方式などの形式面を初め、その主題・文体・修辭などの各方面にわたつて、「甲陽軍鑑」の主流的本文とは全く異質であり、同一著者によつて著述されたものとは思われない。要するに、これは本来本文部とは直接關係を持たないものがなんらかの事情で混入した可能性の強いものと思われる。

ただその混入という判定を輕々に下すことはばむのは、その末尾に「天正三年乙亥六月日 高坂彈正書之」との奥書相當の添え書のあるためである。その添え書きを信じれば、形式上その他の違和感にもかかわらず、それが高坂彈正の筆によるものであることになり、それに従うなら、本来は「甲陽軍鑑」と無關係な武家礼式上の伝書を高坂彈正の書記したものがあつて、それがあつた時期に「甲陽軍鑑」の品第十六の末尾に添加されたのであらうなどと解すべきことになる。しかしそのように好意的に理解しても、そのことは本書の編集意図の混乱を同時に意味するものとなるであらう。この増加三項目にしても六項目にしても、それらが内容形式の両面から伝授物の一種と考えられることから、伝授物における現象として処理を考える方が適切であらうと思われる。万治版本の増加六項目にはほぼ同種類の事項を提出しながらその種の添え書は見られない。そのように明暦版本の三項目にも本来添え書はなく、刊行の際版

下書きなどによって本文の他の部分に準じて意識的にか無意識的にかその添え書が附加されたのであらうと考えられる。伝授物ではこの種の現象はきわめて普通に行なわれていたことであって、いちいち例を挙げるまでもないことである。この三項目における奥書相当の添え書はそのように解釈すべきものであると思われる。

万治版本に見られる「団・扇」などの六項目は「訓閲集」に多い事項である。既述したように、それらは中世の戦闘における指揮者用具であり、近世では実戦的にはほとんど無用の長物化したと思われるが、慣習的に近世の各流兵法学によく引き継がれて、それらの兵法学の軍札に関する事項として伝授されたり、近世の武家礼式家の一つの指導項目とされたりした。したがって中世末もしくは近世初頭の兵法学者がそれらに関する伝書を所有していたり伝授を行なったりしたとしても、決して不自然なことではない。この六項目も前三項目と同様に「甲陽軍鑑」の主流的記事とはその内容形式の面で異質であり、前三項目と同様に他の伝書等が混入した可能性が強い。この六項目に共通して見られる現象は、各項の本文の末尾に「右団一切の法は委細団之巻に記」「右采牌造ル儀式或は種シ子吉田等の事は委細采牌之巻に記」などと添え書することである。これらのことは前の三項目に見られず、そのことから三項目と六項目とは別の時点で増加が考慮されたことその他を想起せしめられる。なおこれら「団之巻」などの巻名に相当するものは現「甲陽軍鑑」には見られないし、それとは本来異質な記事なので、ありうることを予想するまでもないことである。

以上の三項目および六項目が「甲陽軍鑑」の本文と直接的関連がないとすれば、どの種類の伝書群からの混入かと考え、ひとまず「訓閲集」や各流兵法学の軍札関係を調査したが、適当するものを発見しえなかった。が、たまたま石岡氏から借用してあった「甲州流軍書目録」(旺文社蔵)の中にそれを発見した。その「軍鑑挙要」の部の「故実之部」と「兵器之部」とにそれがある。

故実之部

一 献立の次第 一 三峯膳の次第 一 婚礼の次第 一 棚飴の次第 一 産着の次第 一 喰物の次第 一

元服の次第	一騎馬の次第	一色装の次第	一步弓の次第	一矢開の次第	一制札の次第	一具足
餅饅の次第	一馬の次第	一厩の次第	一狩の次第	一山詞の次第	一能の次第	一鞘の次第
合十九冊						

兵器之部

一団の巻	一軍扇の巻	一実検扇の部巻	一再拝の巻	一南天木鞭の巻	一式正の母衣の巻
一旗の巻	一鎧の巻	一小具足の巻	一太刀の巻	一衣類の巻	一勝軍木弓の巻
一簾の巻	一胡籙の巻	一調度懸の巻	一螺貝の巻	一旗本太鼓の巻	一足輕太鼓の巻
一觸鐘の巻	一式正幕の巻	一暖簾幕の巻	一内幕の巻	一毛沓の巻	一敷革の巻
一小床机の巻	一馬上鞭の巻	一馬具の巻	一仮再拝の巻	一番母衣の巻	一仕寄の巻
合四十二冊					

明暦版本における増加の「弓箭之巻」「能之次第」「鞠之次第」の三項目は「軍鑑挙要」の「故実之部」の「狩の次第」「能の次第」「鞠の次第」と関係があるかも知れないと考えた。同様にして万治版本における増加の「軍配扇の事」(表題欠)「采牌造作法」「鞭造作法」「扇造作法」「唄之事」「押太鼓・寸法模様之事・小太鼓」の六項目は、「軍鑑挙要」の「団の巻」「再拝の巻」「南天木鞭の巻」「軍扇の巻」「螺貝の巻」「旗本太鼓の巻」「足輕太鼓の巻」などと関係があるかも知れないと予想した。そのうえ「軍鑑挙要」の当該伝書を確認して、私の作業前予想の正しかったことを知った。その詳細については別の機会を待ちたい。

そのようにして「甲陽軍鑑」の古版本の成立に際し「軍鑑挙要」が重大な位置を占めることが明らかになった。景憲所持の元和七年本の品第十六に弓箭等の三項目を挿入して明暦版本の本文部が成立した。本文部の末尾に添え書きした奥書相当の「天正三年」の項は版下書きなどの恣意的書き入れと思われる。同様にして万治版本の作成に際して

明暦版本の当該部分のあとに六項目を追加して本文部分を完成させたわけである。

杉山公憲は景憲よりの聞書の全てを一部に分類して「軍鑑挙要」を編集した。その聞書はおそらく長期にわたる伝授の聞書で、そのため形式や内容に不統一はありえたであろう。それを「軍鑑挙要」に編集するには形式等の整備統一を必要とするはずである。そのため部分的手直しなどは必然的にせざるをえなかったであろうが、しかし聞書の本質を逸脱することはなかったであろう。公憲は景憲からは兵学上の後嗣として信頼され、あらゆる伝授を受けたが、同時に忠実に景憲の意を帶し、その兵学上の理念等を逸脱する行動は本来的に行なわなかったものと思われる。その意味で「軍鑑挙要」は景憲の真の意図を最も適切に伝えるものと言ってよいであろう。ただ伝授者中心に言えば、景憲の伝授は長期にわたるものであるため、伝授内容等に若干の推移のあることは避けられないし、被伝授者の側にも聞きもらしその他の現象のあることもまた避けられない。それらを含みとして「軍鑑挙要」を把握せねばならぬわけである。とにかく「甲陽軍鑑」の明暦版本も万治版本も景憲の生前に刊行された。そしてそれらの版本と「軍鑑挙要」とがある種の関係性を持つことが明らかになったが、それは直接的にか間接的にか景憲の指導があずかって力あることを示すものであり、そのことを「軍鑑挙要」が証明したということになる。また逆に「軍鑑挙要」は延宝八年に成立しているが、明暦版本や万治版本にその一部が関係を持つことが明らかにされてみると、その本体の成立時期はかなり限定されることになるわけである。

(三) 「軍鑑挙要」の武者言葉

以上「軍鑑挙要」に関して縷々と述べた意図は、編者杉山公憲は景憲兵学の忠実な信奉者であり、彼の編するところは全体の形式を整えるなどのための若干の操作を除けば、内容的にはことごとく景憲の伝授に基づくものであろうという点にある。したがってその「軍鑑挙要」には「武者詞の巻」が納められてあり、それは一つの武者言葉集を形成しているが、その編者は杉山公憲であるけれども、その伝授者は景憲であり、公憲は景憲の意を帶してそれを一巻

に編したのであり、実質的にはそれは景憲著武者言葉集としての性格を持つものと考えうるということにある。たしかに、この種の伝授物では、被伝授者が新しく伝授者になる時、その新しい伝授者は旧来の伝書に自己の新解釈を加えたうえで伝授することが多いもので、どの伝授物でもその可能性は必ず考えておかねばならぬ。このばあいも同様であろう。ただ多くの伝授物を見てきた経験から、伝授内容の改変には、それを好んでする型の人物と比較的忠実に伝承する型の人物とがあり、前者は体系改革型の人物に多く見られるということについて述べたことがある。公憲型の人物は兵法学上にも師伝を忠実に祖述する型の人物かと思われる。したがって、「軍鑑挙要」の個々の伝書は景憲の伝授の忠実な祖述と考えてよいのであろう。そのような考え方にたつて、この兵法学の伝書体系の中に武者言葉集を含めるという考え方も、これに武者言葉という名称を与えることも、これにどのような語群を含めるかということ、即ち根源的には武者言葉をどう定義するかということなども、すべて景憲の意向の反映と考えておきたいのである。

問題を本論の武者言葉にひき戻せば、「軍鑑挙要」の「小勇之部」に「武者詞の巻」がある。それを如上の理由によつて景憲の意図による著述と考え、その観点に立つてこれについての考察を加えることにしたい。そのことに関連して今一度、景憲には武者言葉について、それを兵法学上の命題として考察するに足る契機が具わっていたのか、という自問に自答しておきたいのである。そのことについてはすでに散発的にしかしそこに若干焦点をおいて述べてきたつもりであるが、それをまとめればこういうことになる。第一に、景憲は岡本系の「訓閲集」の「軍配文字」の伝授を受けているが、それには武者言葉の萌芽的記述があり、その「軍配文字」の精神的風土に立ち、更に一歩進めれば武者言葉集に進展するということは既述のごとくである。景憲には、十分その土壌があり、他流で武者言葉集を作成しているので当流でも作成しようといった他発的な理由からでなく、自発的に自家燃焼的にそれを十分になしえたと考えられる。第二に考えられることは、ある種の武者言葉について指導の必要性のあることが心ある者に論じられ

ていたであろうということである。中世末から近世初頭にかけて盛に行なわれた武辺咄や、巷にあふれた軍学講談の席や、素行の「配所残筆」に見られる軍学者の論などがそれを力説した場であろう。その直接的きっかけは近松茂矩の「軍語摘要」(享保二年序)に述べるようなものであったろう。

既ニ慶元浪速ノ役ヨリ寛永島原ノ変ニ及ンデ 其間二年ナリシニ 諸士ミナ軍語ヲ忘レ 可笑言葉多カリシト
ナン

即ち慶長元和の大阪の役終了後わずか二年の島原の乱において、武士たちは武者言葉を忘れており、ぶざまなことが多かったそうだという。慶長元和の頃には武者言葉は使用語彙であり、武士のたしなみであったため、特別の指導がなくてもその用語を誤ることはなかった。ところが、それからわずか二年後の島原の乱では、ほぼ一世代の間泰平が続き、戦闘上の中心者が交替したり、第一線の武士が交替したりまた同一人も武者言葉を忘れたりして、滑稽なことが多かったというのである。そのことのため武者言葉の指導の必要性があらためて認識され、それを契機に多くの武者言葉集が成立したことが考えられる。近世初頭にまだ何流とも定めぬ人による兵書が多産されたが、それらの中に武者言葉集を持つものの多く出現したのは、そのような武家社会の要請に答えたものと思われる。

武者言葉にはもう一つの性格がある。それは兵法学の学術語としての性質であり、そのため兵法学者がそれを自覺的に集めようとするということは当然のことである。またこれには武家礼式家の言語指導の影響により武士の教養語として言葉の好悪を選択するという意図から生じたものもある。それらが同じく武者言葉の指導の中にとりいれられることもある。景憲が武者言葉についてどのような概念規程を与えどのような指導を考えたかは、「武者詞の巻」の具体的内容が示すであろう。

「武者詞の巻」を含む「小勇之部」は、次の巻から成っている。

一 旗旌の巻 一冊 一 茅戟マヤの巻 一冊 一 軽卒の巻 三冊 一 斥候の巻 四冊 一 小勇の巻 四冊

一戦功の巻 一冊 一不覚の巻 一冊 一武者詞の巻 一冊 合十六冊

「小勇之部」の直前は「攻戦之部」である。「攻戦之部」がいわば指揮者レベルの戦闘に関する事項を扱ったのに対し、「小勇之部」は、軽卒・斥候・小勇などの平士の戦闘行動に配慮を置く巻を中心に据え、量的にもそれらの多いこと、戦功・不覚などの個人への評価を行なう巻を持つことなどからして、これは平士もしくは一騎武者レベルの戦闘に関することを扱う部門とすることが出来る。そのように考えるなら、「武者詞の巻」を「小勇之部」に納めることは、近世の武者言葉集史のなかでそれは重要な歴史的な意味を持つことになる。というのは、以後の武者言葉集は「一騎武者受用之巻」「老騎受用之巻」「一騎受用抄」「一騎武者発動集」「武家受用抄」などと一騎武者の戦場心得一般を述べたものに附設されるとか、一騎武者の戦場における部分的戦闘行為についての技術的留意事項に関連して附設されることが多いのと、これは関連があると言えるかと思われるからである。また素行の「武教全書」では、「小身の侍武功の事」の項の中に「小身の士軍詞之事」を設けているが、それは「小勇之部」の「小勇の巻」「戦功の巻」「武者詞の巻」などに関連があるかと思われる、いずれにせよ師景憲の意を帯するものと言えるかと思われる。その他要門流の流祖沢崎景英の「武者言葉大概」についても要門流兵法学ではそれに対し素行と同様の兵法学体系中の位置を与えている、などと近世の各流兵法学では、景憲以来ほぼ一貫して武者言葉集と武士の身分との相互関係については、類似の視点を持ってきたということが出来るであろう。

そこに中世の「訓閲集」体系と近世の景憲兵学との間には、一線を画すことができるわけである。「訓閲集」では、上泉系に「文字相伝」があり、岡本系に「軍配文字」があり、それらは武者言葉集の萌芽的伝書であるが、本来「訓閲集」は指揮者レベルの兵法学体系であり、「文字相伝」や「軍配文字」は指揮者を主たる対象とする伝書と言ってよい。そのように考えれば、岡本系の伝授を受けた景憲が岡本系の「軍配文字」をみずからの「武者詞の巻」に展開させるにあたって重要な変革を行なったことになる。その第一は、文字中心であったものを語彙中心に改めたという

ことであり、その第二はそれに伴い、従来対指揮者レベルと考えられていたものを対一騎武者レベルに格下げしたことである。それはたしかに武者言葉の歴史の中では重要な変革であるに違いなく、更にそれだけではなく、中世の兵法学では指導対象が指揮者級か平士級かの差を考慮しなかったのに対して近世ではその種の差を弁別し、指導内容にも考慮を加えることになるが、景憲の行なったこれらの改革はそのような指導上の変化を予想するものであったと言っているであろう。特にこの後一騎武者を対象とする伝書的大量生産されるのも、そのような傾向に対応するものであったわけである。

「武者詞の巻」は、題簽に「軍鑑挙要 武者詞巻 全」とし、内題には「甲陽軍鑑末書拔書 武者詞 次第不同」とある。奥書に「廷宝八^{庚申}歳十一月日 小幡勘右兵衛尉景憲一杉山八藏公憲（印）」とある。奥書によれば本伝書は他の伝書と同じ日付・伝系・伝授者名を備えていることから、それらと同一時に献上されたものの一書であることが知られる。内題からは本伝書が「甲陽軍鑑末書」からの抜書と解される表題を持つが、通例「甲陽軍鑑末書」と呼ばれる一書を検してみるに、該書には発見できない単語が多かった。手もとの資料の不備なためかと考えていたところ、石岡氏より「甲陽軍鑑」からの抜書によって作成した著作には「甲陽軍鑑末書」の名を使用するものが多いとの教示を得た。そのように解すれば内題の「甲陽軍鑑末書拔書」とは、「甲陽軍鑑」の末書であり、その抜書でもある書との意となる。

「軍鑑挙要」の武者言葉を歴史的に位置づけるためには、それを前代の武者言葉と比較しておくのが好都合であろう。前代のそれには上泉系の「文字相伝」、岡本系の「軍敗文字」があるが、ともに「訓閲集」兵法の中に文字指導を導入したものであり、「軍敗文字」には文字指導を越えて用語指導に及ぶ萌芽が見える、これが武者言葉集の先駆的作品となるわけである。「軍配文字」所載の単語を分類すると、次のようになる。

(1) 同一事項につき、敵は呪い味方は称えるように言うもの。(戦場詞)。敵ノ幕ヲハ引ト云・闇ノ幕ヲハ打ト云(略)

(2) 指揮官に関する用語に特別の表現を用いるもの。(対指揮者用語)。大將ノ御陣屋ヲ張ト云・造ト云ヘカラス

(3) 兵法学に関する術語で、これには、

(ア) 個人用の戦闘用具で、武器・兵具・物具・戦具に分類。

武器―甲等 兵具―弓・箭等 物具―櫓橋・旗等 戦具―腰巻・弓射袖等

(イ) 戦場用品。 狼煙等。

現在、武者言葉とはこの(1)戦場詞と(2)対指揮者用語とを指すものと理解されることが多い。しかし本書以後の武者言葉集には(3)兵学用語が多く加えられるようになる。ことに武者分と呼ばれた戦闘用具の身分的分類が加えられるようになるが、戦闘用具は特にそのための専書が発達して武者言葉集に採録されることは少なくなる。むしろ常に陣取詞・城取詞などが加えられるようになり、時に船詞の添えられることもある。これらのほか、私が軍礼語として一括しようと考えている語群がある。兵法学に関連するものというよりも、小笠原流などの武家礼式家の指導用語が採択されたものと考えられる。教養ある武士の使用することの好ましいと考えられる用語を集めたものである。それは、たとえば島田貞一氏蔵「小笠原流大目録」の諸伝書が示すように甲州流兵学の中に小笠原流の水島派の軍礼が取り入れられる、というような過程の中で発生したものと思われる。

「軍鑑挙要」武者言葉は、それ以前の「軍配文字」のそれと比較したばあいきわだった特徴を示すし、ことにそれ以後の武者言葉集と比較すると顕著な特徴を示している。それは、戦場詞・対指揮者用語と名付けたものがきわめて少ないこと、また軍礼語と呼ぶことにしている類も少ないこと、それらに反して兵学用語がきわめて多く、「軍鑑挙要」の九割はこれで占めると言つてよいことである。武者とは軍装をした武士を言うという類の定義が「甲陽軍鑑」

にある。⁽¹⁾ その武者の心得ておくべき用語というのが武者言葉の本来の意味であろうと考えられるが、そのように理解すれば、「軍鑑摘要」が兵学用語を中心にした理由は十分に納得できる。もっとも岡本半介の解釈はもう少し幅広いものであったし、その解釈に立てば、景憲とても岡本半介に近い解釈に立っていたであろうが、たまたま景憲の分析したテキストの「甲陽軍鑑」の叙述に引かされて、兵学用語中心の武者言葉集にならざるをえなかった、とも考えられる。また、当時の景憲は甲州流兵学創立に関心を持っていたためいきおい兵学用語中心になってしまったとも、戦場詞・対指揮者用語・軍礼用語は直接兵法学に関係しない用語なので除外もしくは略述した、等々のことも考えることができる。ただその解釈はともあれ、資料の示す客観的事実は右のごとくである。「軍鑑摘要」には次の語について解説がある。

(1) 戦場詞 引く・上る(人数)、打つ・はしらかす・張る(幕)、けく取込む(旗)、げだつ・はつかづ(母衣)。首をとらせた。

(2) 対指揮者用語 進む・向させた(馬)、弓矢を取る(国政)。

(3) 兵学用語

(ア) 陣場詞 天の利・地の利・人の和、正の備・寄の備・正・寄、陣取・根小屋・小屋落・陣払・小屋払、手組・手分・人数配・場所・対重・座備、殿・後詰・陣屋守・遊軍・加勢、ししきき・けだし・外張・馬印、案の裳・時の虎口・小屋印

・小荷駄印・仮再拜、加勢働・とい働・備人質、取くさる・立かかる。

(イ) 城取詞 平城・平山城・山城・取出・付城・宿城、籠城、山ひこ・着分矢倉・犬走・武者走・升形・横矢・かざし・葎・一揆・持口・持口仕寄場、火攻・蛇攻・むくろ入・まくり攻、ぎやじ弓矢、乗さだむる・乗やぶる・乗しく・乗すます、

さまとち。

(ウ) 夜軍用語 夜軍・夜討・夜込、合形・相言葉・足並・くらかけ・れん問・度請。

(エ) 夜間戦闘用語 大合戦・小迫合、地焼・放火・試・利根働・ふまへかかり・費し働・坪せり合・呼はり攻・裏切・指順見、

分取・生捕、防戦・喰つく・付入、立すくり・居すくり・入ふとり、立くらへ・足輕を懸る、呼わりあげ・隠れゆひ・心

三備・上鉄砲を懸る、馬を入れる・乗込・乗切、場所、芝居ふまゆる、白鷄・ひより見・口過人・央作鬼入。裏崩・見崩・聞崩・友くづれ、実衆・翻者・おびえ・とき。

(オ) 戦術用語 軍配・軍法、武略・智略・計策、見せ旗・守旗・声の鉄砲・ちやう林・矢ころび、古事袋、味方を入れる・はつはの馬・時の胴肩衣、忠節・忠功。

(カ) 武者分 一本再拜・副將軍・武者大將・六奉行・武者奉行・旗奉行・持鎧奉行・陣場奉行・小荷駄奉行・普請奉行・長柄奉行・士大將・足輕大將・使番・隠居武者・同心・馬足輕・ずんぼう武者・徒府武者・実検使・警固・目利・目付・横目・在郷近習・二十人衆・小人・足輕武者・簀指武者・中柄武者・中間・青葉者、大物見・中物見・小物見、三者、物見、物きき・かぎ・拾奸・先奸・八重奸・地下蟠・大奸・小奸、すつば・斎神、降参の士・先方衆。

(キ) 高名用語 一番鎧・二番鎧・大鎧・ようの鎧・追かけ鎧・殿の鎧、鎧下の高名・鎧脇の高名・まえわたり・討留の高名・崩際の高名、くみ討・引掛の働・馬働・検使の働、付人の鎧・色付。

(ク) 戦闘用具語 武家四門、合形。

(ケ) 戦場用品語 柵木・一代柵木・末代柵木・かくる・結、捨篝・木篝・釜篝・猿尾火・時の胴・肩衣、狼煙。

(4) 軍礼用語

(ア) 首実驗 実檢・対面・見参、一首・首ちかひ、首を取・印を上る、首砂勝・おい首・はみ入、ばい首、場所。

(イ) 誉め詞 見事・りりしき・いせ有・はなやか、先をかせぐ。武変者・覚の者。

(ウ) 軍礼 礼馬

(エ) 数詞 一頭・一ツ・二ツ・一刎・一領・一面・一指・一足・一腰・一振・一挺・一張・一丁・一穂・一指・一手・一桶・一筋・一枚・一つ・二つ・一帖・一つ・一枚・一口・一口・一口・一具・一足・一答・一掛・一間・一荷・一駄

本書の解説法を知るため代表的な単語についての解説を挙げてみる。

(1) 戦場詞

一引といふは 敵の人数をあくる事也 一人数上るといふは 味方の人数を引事也

一引といふは 敵の幕の事也 一うつと言は 味方の幕の事也 一はしらかすと言は 船幕をうつ事也 一張といふは

葬礼の幕の事也

一旗をまくと言は 敵の事也 一旗を取込と言は 味方事也

一げだつと言は 母袋をたゝむ事也 一はつかづと言は 母袋を袋に入事也 一母衣を台に上ると言は 串許の事也

(2) 対指揮者用語

一進む向わせたと言は 大将の馬の事なり 一弓矢を能取と言は 国持の誉ある人の事なり

(3) 兵学用語

一手組といふは 人数を組合事也 一手分といふは 人数を分る事也 一人数配といふは 籠城に城まはり合戦備々を下

知して指向る事也

一平城といふは 平地ニ築城の事也 一平城といふは 本丸山外は平地の城事也 一山城といふは 山に築城の事也

一付城といふは 敵国にみかたの城を築事なり

一夜軍と言は 本大将惣勢つれて合戦して勝負を決する事也 一夜討といふは 対陣の時一手二手出て一陣二陣取計へさき

衆仕かけ少の勝負在之事なり 一夜込といふは 敵味方の境目の城にて宿城へ夜働入或は火をかけ焼事也

一喰つくといふは 敵引時味方したひ行に敵返せは戦或は押返され引とれはしたひ行事也 一付入といふは 右のことくし

たひ行敵城へおしこむ事也 一入ふとりといふは 敵味方へ交たる事也 一立くらへといふは 味方大勢敵小勢の時味

方惣軍を出し備を立いきをひを見る事也 一足輕を懸るといふは 敵味方備を立守りあふ時足輕をすゝめ弓鉄砲を打か

くる事也

一武略と言は 自国をよく治て謀をなす事也 一智略と言は 敵によって転変して謀をなす事也 一計策と言は 出家町

人の謀を能する事なり

一本再拜と言は 本大将の事也 一副將軍と言は 大将の近き一家の事也

一鎗下高名と言は 鎗を合する間に鎗脇の人敵を討事也 一鎗脇の高名と言は 鎗を合する人ある時刀弓鉄砲をもって敵を

押へ鎗を合する人の事也

(4) 軍礼用語

一軍礼といふは 一切の武具の仕立やう出陣帰陣の時祝作法等の事也

一 対面といふは 敵の大將の首をみる事也 一 見参と言は 敵方歴々の首をみる事也 一 実検と言は 頸を見る惣名の事也

一 見事と言は 手負を替る事也 一 りゝしきいせの有 はなやかといふは 具足を替ることはの事也

一 礼馬といふは 貴人の方の足をばづし手綱をたくり鞍の前輪へ掛り礼をする事也

一 一頭といふは 大將の甲の事也 一 ツ二ツと言は 平人の甲の事也 一 一刎といふは 敵の甲の事也 一 一領と言は

具足の事也 一 一面といふは ほうの事也 一 一指といふは 小手の事なり

武者言葉集としての「軍鑑挙要」は兵学用語を中心とするという点で、武者言葉集史の流れの中では前後に比類を見ない形式を持つものと言える。その兵学用語を意味分野を中心にして分類してみると、陣場詞・城取詞・夜軍用語・武者分などの下位区分ができる。この意味分野による分類が以後謙信流を名乗る要門流の「武者言葉大概」等に活用されていることや、「軍鑑挙要」で軽視された戦闘用具語や戦場用品語が以後の武者言葉集の多くに同様に軽視される傾向を持つことなどは、留意すべきであろう。その兵学用語では、その他の武者言葉集と比較すれば、圧倒的に語彙量が豊富であるばかりでなく、語彙分野においても範囲が広い。もちろん現代の我われの知識からすれば、多くの語彙量が期待できたはずであるし、各語彙分野の体系ももっと充実できたはずである。たとえば軍礼用語中の首実検関係にしても、当時すでにこれは軍礼中の重要な事項の一つに数えられ、また実戦においても参加武士の戦功を論じる上で重要な事項の一つになっていた。それで首帳の書写法その他が嚴重に行なわれていたので、戦場で獲得した首級がどのような性質のものか等についてはきわめて細部にわたる弁別がされ、それに対応する種類名が付けられていた。その首級の性格が本人の勲功・家名・行賞等に直結するものである以上、それは当然の帰結である。にもかかわらず、本書における記載は十分とは到底言うことのできないようなものである。それらのことは本書のすべての分野の語彙について言える。

しかしそれらの現象も、編者の体系的思考力の弱さによるものではなく、本書が「甲陽軍鑑」を読むための参考資料として編集されたのであり、本書は語釈の集録という性質を持つものである、とすれば解消する問題なのかも知れない。この「軍鑑挙要」の武者言葉集のそれ以後に与えるものとして重要なことは、甲州流の各流の武者言葉集の中に、これの直接的後継者とすべきものの見当らないことである。景憲著とされる基本的伝書はどの分派にも等しく行なわれるにもかかわらず、同じく景憲によるものと考えられる武者言葉集の後継者のないことは異様なことである。各分派において武者言葉集のあり方について別の解釈が優勢になったためその継承をとりやめたということではあるまい。流祖の伝書というものはもっと優遇されるはずだからである。もっとも自然な解釈は、景憲がこれを杉山公憲以外の者には伝授しなかったからであろう、ということである。兵法の伝授にはそのように被伝授者を限定することとはしばしば行なわれる。ただそれらは多くのばあい特定の奥義に限るが、杉山公憲にそれを与えている。公憲は景憲にとって晩年最大の愛弟子であったため、各種の伝授・指導を行なったが、それらの中に武者言葉に関する事項があり、それらは他の門弟には積極的な指導を行なわなかったため、公憲を通してのみ後世に伝承されることになったのではないかと思われる。

その四 有沢派の武者言葉集

(一) 有沢派と武者言葉との成立

有沢派のことについては、石岡久夫氏の「日本兵法史 上」にきわめて要を得た解説がある。まずそれを要約的になざることから始めたい。金沢藩の甲州流兵法学は前田利常の臣関屋政春によって明暦以前に伝えられたが、その甥有沢永貞の時強力な甲州兵法学派となった。永貞は前田光高に仕え、初め叔父関屋政春に就学したが、延宝元年（一六七三）三四歳の時政春に同行して佐々木秀乗に入門した。また寛文年間に北条流の「師鑑抄」「雄鑑抄」を書写研

鑽し、延宝三年（一六七五）には政春を介して山鹿素行にも従学した。このようにして永貞は、佐々木秀乗系の甲州流を基盤としながら、岡本半介の「訓閲集」により古伝の軍配兵法をも学び、更に新興の北条流・山鹿流の学説を採入れ、次第に独自の兵法体系の樹立に向った。永貞は寛文元年二二歳の時、すでに「城取本元抄」「兵法修鑑抄」を著述し、貞享三年には佐々木秀乗から印可を受けたが、その頃から著述につとめ三十数種の著述を行なった。それらによって「有沢流ともいふべき独特の甲州流兵法学を樹立した」と石岡氏は述べられた。なお有沢派は金沢藩において藩学的地位を確立し、明治維新时期にまで至ったことである。

甲州流の流祖小幡景憲はもともと「訓閲集」の体系とは異なる革新的な兵法学の樹立を志したが、晩年に至るまでに景憲の辿った道は十分に体系的兵法学の確立と言えるほどのものには至らなかった。それに比べればその門下の北条氏長や山鹿素行の兵法学は体系的には遥かにすぐれたもので、それぞれ独自の体系を持つものであった。永貞が佐々木秀乗の印可を受けながらそれに満足せず、更に北条氏長や山鹿素行に近づいたのは彼らの体系的思考法に惹かれたからであり、それらの学習を経てついに氏長や素行とも異なる道を開いたのである。しかも基本的にはあくまでも甲州流の一派を標榜したのは、その「軍詞の巻」の解説編に言うように甲州流が幕府の御用兵法学だからであつたろう。またその体系は、氏長や素行のそれとは異なり、思想的体系化よりも技術的事項の総合化を指向するものではなかったか、と私には素人考えながら推測される。そのような立場なので、武者言葉集も特異な位置を確保できたのではないか、と私は考えているわけである。

有沢永貞がその兵法学体系を簡略にまとめたものに「枢蜜要論」があり、その末尾に自伝を述べた「枢蜜要論自修之秘」がある。その要点を辿ることによっていま一度有沢兵法学の成立経緯を辿ってみたい。テキストは金沢市立図書館本に拠った。

我兵学ニ志シ勤ムル事明暦三丁酉年ニ始ム 元師関屋氏政春ハ予カ母ノ弟外叔父也 政春若カリシヨリ武義ニ志深ク劔鎗ノ術其業ヲ極メ就中鎗ニ長ス(略)然而在江戸勤仕ノ次而ニ甲州流ノ軍法小幡景憲ノ伝受ク数人ニ尋レ之 就中佐々木氏秀乘其一流ヲ極ム 今年加陽ニ帰テ志ノ士ニ於テ是ヲ教導ク 我亦一向ニ勤之(八十時十八歳)(略) 此年ヨリ身志ヲ兵法ニ抛テ寝食ヲ忘レ甲陽軍鑑末書ヲ伝授シ習之 城ヲ取ノ才力群弟ニ越ユ 思ニ此年山鹿氏義巨全書編輯ノ翌年也 政春猶年雄江府ニ往來シテ頃年山鹿氏ニ因ンテ兵法ヲ問其伝雄鑑用法等也 万治二己亥年政春江府ヨリ帰テ甲陽ノ書相殘ル所ナキノ許状ヲ得且此年雄鑑用法等ヲ伝受其間城取ニツイテ粗自作ノ書アリ 此年景憲述作スル所新品等写之 寛文元辛丑佐々木氏未対面トイヘ共數年作ル所ノ城ト自書トヲ証シテ甲州流義伝授ノ免状ヲ送ル 是政春カ演説ニ依テ也 翌年壬寅ノ夏政春加陽ニ帰テ武教全書ヲ以テ我ニ相伝スヘキ旨山鹿ニ約シテ密カニ伝之 甲陽ノ書數年習熟スルノ余力ヲ以テ学之ニ不煩 政春功名一府ニ秀テ今年冬ヨリ太守ノ御前ニ出テ知所ノ軍書其口決ヲ言上ス(略) 既初学ノ歳ヨリ我聞所ヲ以テ則師ニ代テ講釈之 城築砂形等ヲ作テ相弟子ニ示ス事ハ惣テ我役トス 寛文甲辰ノ年ヨリ父ニ随テ越中高岡ニ趣キ住シ聊閑暇ヲ得テ粗内外伝ノ書ヲ伺甲陽ノ書ニ出ス所ノ古事古語等ヲ考多ク記録ヲ紀明ス(略) 寛文六丙辛年公命ヲ以テ雄鑑ニ載スル所件々古伝ヨリ出ル所ヲ拔出シテ書之且自註ヲ加エテ捧之 同十一辛亥年政春代ニ命シテ曰武教全書ニ於テ相伝ル所ノ口決是ヲ集メ書テ抄トシ自得ノ可不可ヲ顯ハシ其事ヲ極ムヘキ事ヲ示ス(略) 延宝元年癸丑ノ春勤仕ノ身ト成仲秋ニ到テ初テ武陽江府ニ趣ク 政春先ニ御供ニ候ス 我ヲ誘引シテ佐々木氏ニ対面セシム(略) 翌年加陽ニ帰リ乙卯ノ年亦政春大守ノ供奉シテ孟夏江府ニ到リ予亦季秋ニ江府ニ趣ク(略) 今歲山鹿氏異学逆士ニアラサルノ正教露顯シテ其囚ヲ免サレテ十年ニシテ江府ニ帰ル 政春再会ヲ悦ヒ我ヲシテ見エシム 翌年ノ望志ヲ述其後數度見ヘテ教ノ一大綱ヲ聞 世ニ山鹿氏之門弟トシテ兵法ヲ説者其心狭フシテ事ニ泥ミ跡ニ迷フノ卑説ニ替テ其教明公志ヲ仰ク 然ニ政春先年我自記スル所全書ノ註解是ヲ先生ニ見セシメテ其可否ノ難ヲ聞シ事ヲ進ム 是ヲ恐レ是ヲ恥トイヘトモ下問ヲ不辱ハ学者ノ専務也 故ニ是ヲ見セシム 先年暇希ニシテ悉クニ不見之 一日我ニ言ラク 全書ノ件々既一千六百余ニ及フ 和訓假名書トイヘトモ天下国家ノ政事軍策生命ヲ統トモ猶則メ尽シカタシ 先年政春ニ談スル所胸中ニ治メ自記ニ留ムル趣キ少キ異同ナキニ非ス 且其初メ此書ヲ編輯シテ既ニ廿年ヲ経 其書其伝今案者ニ替テ此言此程改メント思所々不少夫兵法ハ天下ノ兵法 一人ノ私スル所ニ非ス 千百有余ノケ条ノ内ニ三十条是ヲ誤ルト言トモ其大旨ヲ不違ハ兵ノ道他ニ馳ルニ非ス 如此其知所ヲ集メ書テ自得ノ可否ヲ不辱師友ニ出シテ見スル者有事希也 故ニ感レ之 猶初学ヲ導キ正意ヲ失フヘカラス 当時武事ノ衰蔽歎ヘシ思ヘシ 必怠ル事有ヘカラス 今兵法ヲ学ヒ城ヲ取陣ヲ作ル者多クハ分間度量ノ実ヲ探ルニ其極ヲ知者希也 我伝ル所唯其本立テ其事全ク実学ナラシメン事ヲ欲スルノ外無他ト云々 我此言ヲ聞テ更ニ忘ルヘキノ期

ナク全書ノ自得先生ニ可否ヲ述ルノ直説如此ノ上ハ末学ノ毀誉ニ心ヲ悩スマシキ事ヲ思 且義巨ノ猶子今ノ津輕將監其別宅遠方ニ居ス 亦是ニ便テ全書ノ内不審アル所々是ヲ問聞(略) 延宝五年丁巳太守ニ供奉シテ江府ニ到ル 此年政春不來我猶先年ニ見エ教戒ヲ聞 是年冬案問ヲ作り城築陣營分間之図座備行列人形之絵ヲ顯ハシテ是ヲ見ス 先ニ聞兵学度量分間ヲ明ニシテ兵法実学ヲ委フセン事ヲ思ニアリ 先生深ク感之曰 兵学ノ事業実修既修就シ畢ル 猶此上ヲ勤ムルトキハ亦一生ノ余力ナシ 此迄ニシテ止ヘキノ許言ヲ聞 其後事業ノ戒ヲ不レ受 猶數年武江ニ來往ストイヘトモ公役年ヲ追テ繁多ニシテ延宝庚申天下ノ受禪天和壬戌臘月ノ回祿皆在江府ノ年ニシテ勤学不靜先生ニ見ユル事希也(略) 元禄壬申孟夏ニ江府ニ下リ季夏ノ比此校ヲ草シ(略) 加陽之住士 有沢氏平永貞

この自伝によつて明らかになつたことは、みづからは甲州流を唱えているけれども、永貞が最も深く私淑し最も深い影響を受けたのは、小幡景憲や北条氏長ではなく、晩年の山鹿素行の兵学だつたといふことである。にもかかわらず山鹿流を名乗らなかつた。それは当時の考え方としては北条氏長も山鹿素行も甲州流の一派だと考えられており、たとえば素行みづからも甲州流を名乗つていたほどだからである。そのため、甲州流の佐々木秀乘に入門してその歿年まで書簡による往復を欠かさぬまに、一方では素行に師弟の礼を尽したのである。甲州流と山鹿流とが異流と考えられるなら、このように二流を兼修するといふことは當時は絶対に許されなかつたはずである。

素行の言として特に引用する言辭で注意すべきは、「我佗ル所唯其本立テ其事全ク実学ナラシメン事ヲ欲スルノ外無他ト云々」とする点で、素行の述べたと思われる多くの言辭の中、特に実学に関する件を引用することである。素行における実学は多くの興味深い論争をもたらし、今これらに介入することを避けるが、永貞はそれを兵学上の問題として受けとめた。延宝五年の江戸下りに関してそれを述べている。「是年冬案問ヲ作り城築陣營分間之図座備行列人形之絵ヲ顯ハシテ是ヲ見ス 先ニ聞兵学度量分間ヲ明ニシテ兵法実学ヲ委フセン事ヲ思ニアリ 先生深ク感之曰」とあるが、城築等の図解の中に兵法実学があると永貞は考え、永貞の解釈もしくは表現に素行は深く感動したとする。ここに少なくもある種の実学解釈が認められるわけであり、素行の真意とは別に、永貞はそこに素行の真意

のひそむものと考え、それを自己の兵学の特質として押し出したのである。永貞が素行から受けたものはきわめて多い。永貞が「軍詞之巻」等の兵法上の技術的な事項により関心を持ったのは、永貞の体質的な思考法に基づくものであろうが、同時に永貞はそれを素行の実学理論にかなうものとして自賛したからでもあらうと思われる。

永貞には「軍詞之巻」を中心とする武者言葉集がある。しかしそれは孤立的な著述ではなく、「軍詞之巻」「軍容之巻」「撰功之巻」「兵器之巻」「武功之巻」の五著述が構成する一連の体系の中に含まれるものであり、それを総括して「兵法拔書足夫之抄」もしくは単に「足夫之抄」と呼ばれることもある。その成立順位は、永貞の子有沢武貞の「足夫之抄私解」中の「軍詞之巻私解」に載せた解説に、「兵法拔書足夫之抄三冊ハ軍詞軍容撰功ノ追加二冊ハ兵器武功ノ有沢永貞作之」とあるのに依れば、初めに軍詞・軍容・撰功の三部が著述され、のち追加として兵器・武功の二部が著述されたことが知られる。永貞がこれらの著述を行なった理由として、武貞は右の「私解」のあとに次のように述べている。

治世ノ士年ヲ逐テ戦国ニ遠サカリ戦陣ヲ勤タル足夫ノ業ヲモ不知成行ニヨリ是ヲシラシメンタメ其類ヲ寄テ集之 其趣ヲ伝語スルノ便リトスル

ここに足夫という者は他流の伝書等に一騎武者・一騎士・単騎・一己・平士・小身の侍などと呼ぶ者のことで、侍大将などの指揮者に属する側ではない者、ひらの侍のことである。足夫のことについては、「足夫之抄私解」（金沢市立図書館等蔵）や「足夫之抄軍詞之巻備行宮秘解」（石岡久夫氏蔵）に解釈がある。「私解」には次のように言う。

一人シテ働キヲナス小身者足夫ナリ 大軍ノ大将ニテモ自身ノ働キヲナストキハ足夫ノ功ヲシラズシテハ成ガタシ 亦大将ノツカウ処ノ士卒ハ則足夫ナレハ其事ヲ不知シテ不叶也 故ニ足夫ノ業ハ初メ也 抄ハシルス也

「足夫之抄」はそれらの小身の侍にとって兵法学上の規範とすべきものであるが、同時に将たる者にとっても部下

の実態を正しく認識するための必要条件となる、との意であろう。また、「拔書」ということについては「私解」に次のように述べる。

甲陽軍鑑之末書惣テ甲州流之書ヨリ拔書ナリ 他家ノ書トイフトモ其实理ニ叶フハ拔書也 就中兵器武功等ニ到テハ古兵ノ遺書談話ニ伝ルモ悉ク集メテ出之 故ニ拔書也

一般に「甲陽軍鑑末書」という書名を持つものは甲州流の書物からの拔書である。他流の書でも甲州流の理論になうものはこの拔書にはいる。軍詞・軍容・撰功の巻は甲州流の書物からの拔書を主とし、要すれば他流の書の拔書も加えてある。ことに追加の兵器・武功の巻は古兵書や談話の類に至るまでも広く集めて拔書したものである。「軍詞之巻」は後述の解説にも言うように甲州流の書物に載せるものを中心にし、他流の語も広く通用するものは加えてある。

また、「軍詞」ということや「軍詞之巻」の性格については「私解」に次のように解釈している。

「軍詞之巻」 天下ノ軍サコトバニシテ通用ノ詞ナリ 私ノ軍法ニテ諸国ニ不知コトバハ用ルニ不足 然トモ甲州流ノ軍詞ハ専用トス 是ハ当時江戸ノ御軍法モ皆甲州流ナルユヘ天下悉ク是ヲ用ル多シ 其外モ諸国タシカニ謂ナラハス言ヲ少々加之 猶古キ家ノ国主等ノ下ニ余国ニ替リタル名目等有之モノ也 是ハ其一国ヲモ治メラレテノ上ニハ一派ノ軍詞モ有ヘキ事也 近代天下ヲ知玉フノ主信長公秀吉公ノ家風ノ名目アリ 御当家天下ノ名目アリ 前ニモ言コトク様子ハ少シ替ル共法ハ甲州流ヨリ出ル所ナレハ是ヲ以テ本トシ余ハ加之 委クハ其所々ニ是ヲ断ルベシ

まず軍詞の定義を行なっているが、それには「天下ノ軍サコトバ」であることと、「通用ノ詞」であることとの二つの条件を挙げていることが注意される。第一条件の「天下ノ軍サコトバ」とは、そのあとの「私ノ軍法ニテ諸国ニ不知コトバ」に対するものである。「私ノ軍法」は幕府の御用兵学としての甲州流に対するもので、甲州流以外の各

流兵法に対する蔑称である。即ち甲州流を公の軍法とし他流を私の軍法とする価値感が基底にある。各流の兵法学の用語であり、兵法学諸流において一般的に使用されていると言えない用語を、「私ノ軍法ニテ諸国ニ不知コトバ」と規定し、それに対し甲州流の用語を「天下ノ軍コトバ」とし、また「当時江戸ノ御軍法モ皆甲州流ナルユヘニ天下悉ク是ヲ用ル多シ」ということを理由にして、軍詞の第二条件としての「通用ノ詞」が満足されると考えるわけである。

右の軍詞についての定義の背後には、軍詞における標準語意識、もしくは学術用語としての兵法学用語の基準意識のようなものが感じられ、甲州流の用語がその資格を持つ語だという認識が感じられるのである。そのような認識は従前の兵法にはなかったし、以後のそれにもない。それらについての永貞の記述は特に留意すべきである。

ところで、小身の侍にとっての兵法学上の規範として「疋夫之抄」が著述されたのであり、それに含まれる五部は小身の侍の心得るべき最も重要な五項目とされたのであり、それが永貞の兵法体系の中で小身の士に対する実学として考えられたわけである。武者言葉集は小身の士の心得のための著述という考え方はすでに小幡景憲に始まり、幕府御用兵学の北条流にはその明示がなく、山鹿素行の「武教全書」には小身の士、平士のための軍礼の中で軍詞のことを説き、また謙信流の一派を名乗る要門流の「武者言葉大概」にも同様の地位を与えられた。その他の流派でも、源家古法の「一騎武者発動集」、北条流の片山秋扇の「一騎受用抄」、宇佐美流の「一己受用」等々一騎武者の心掛けを説いた著作に武者言葉を集めたものの含まれるのも、同様の意図に由来するものである。

一体、中世の兵法は指揮者ことに総大将のためのものだったと言つてよからう。古伝兵法として「訓閲集」がすでにそのようなものであり、小笠原氏隆を経て上泉信綱や岡本半介に至ってもなお本質的にはそうであったと言つてよいであろう。甲州流は最もその伝統を継ぐもので、小幡景憲もその最高弟の北条氏長もその意図するところは総大将のための兵法の組織化であった。山鹿素行の兵法体系も御用学的兵法学の体系の構築が最大の意図であり、事志に反

して幕臣となる機会を逸したばかりでなく、赤穂に流謫されるという悲運に遭遇することになったが、大名級の門人を多く持った。それ以外の兵学でもこの事情には大差ない。ただ近世には学問の奨励のためもあって平士の兵法学に志す者が急劇に多きを加えるようになったこともあり、また身分の固定した社会構造の中で各種の面で平士が実質的に重要度を深めている社会現象に対応するためにも、平士を対象とする兵学上の指導と言うことが不可避に要請せられ、各流の兵法学の中に平士対象の著述が急増することになった。今それらの書名を列挙することは避けるが、それらの著述において平士の心掛けとして何を課するか、が次第に研究されていったが、それらの著述の多くに武者言葉が選ばれたわけである。

図書目録の類に「軍詞之巻」として登録されたものには、有沢武貞の「軍詞之巻図解」を見誤ったものが多い。「軍詞之巻図解」は後述のように比較的多く見られ、家蔵にも二部ある。しかし永貞の「軍詞之巻」は伝本が少なく、管見では静嘉堂文庫・金沢市立図書館・石岡久夫氏の所蔵本の程度である。もっとも個人の所蔵本はもっとあることであろう。その「正夫之抄」は初めにその編集意図として次の辞句を挙げているが、要するに平士のための実学としてこれを編集したことで、「甲陽軍鑑」を読解するための書という性格を持つことを述べたものであろう。「甲陽軍鑑」の読解のためという編集意図は杉山公憲の「軍鑑挙要」に等しく、「正夫之抄」がどのような具体的方法を採用するか興味の深いものがある。

夫兵法ノ教其事繁フシテ其品多シ 是ヲ導クノ諸流事理本末ノ弁見聞スルニ暇ナシ 然ルニ士トシテ戦陣ノ名目軍中ノ常法其
 働之善惡不知之而何ヲカ勤何ヲカ為シ 故ニ其至近ニシテ不知シテ不_レ叶ノ品々ヲ集而正夫之抄トス 如此ノ雜記近世其類無
 ニアラス 然トモ其利多クハ出テ戦国ノ風儀ニ遠キアリ 故ニ甲陽軍鑑ハ中興ノ軍法ノ龜鑑ニシテ其伝広シ 依_レ之余亦若年
 ヨリ学之粗其要旨ヲ聞 然ルニ其書多其言繁フシテ或勤仕無閑暇或老耄無余才而始終ヲ聞正ス事成カタキノ士ニ於テ当務ヲ以
 早ク知シメント欲スルニ有而已

またその巻末には著述年次等について次のように述べている。

右正夫抄者寛年中雖作之後歳視之粗不正之所有之 故重令校正之者一者也 于時元禄巳己正月中旬 有沢永

貞清書之

即ち寛文中に述作し、元禄二年に誤りを正したとのことである。

軍詞の定義として、「天下ノ軍サコトバニシテ通用ノ詞ナリ」と定めたわけであり、その具体的内容が「軍詞之巻」に示されるわけであるが、その実体には若干曖昧な要素が感じられる。それは「軍詞之巻」の構成が二部に分類され、第一部では兵学用語が「備定・行列・営法・城取・武者分・制法」の六項に分類され、それらが更に若干に下位分類され、それぞれに兵学用語が列举されるという方式を取る。いわばこれは教科書版である。第二部ではあらためて項目名として「軍詞」を設け、以下に戦場詞を中心にしてそれを文章形式で解説する方式を取る。全体を軍詞としながら、更にまた特に軍詞と名づける項を作るわけである。そのばあい、第一部の軍詞が兵学用語であるのに対し、第二部のそれが第一部とは異質な要素を持つことが注意を惹く。しかもそれが要門流の「武者言葉大概」とか小笠原流庶流派の小池貞成の「軍言葉之書」とかのような、それ自体で完結した著述と類似の様式を持っていることは、ひどく気になる。この部分は「私解」に「天下通用ノ詞也」として挿入理由を示すものの、他の部分との調和を乱す点でひどく気になり、あるいは別の著述かなにかがここに挿入されたとの感を起させるのである。

ともあれ、「軍詞之巻」の第一部を基本にして略述すれば、これが教科書版であり、武貞の「正夫之抄私解」はそれについての用語の解説を行なった注釈書であり、同じく武貞の「正夫之抄図解」は図解を中心とする注釈書であり、また同じく武貞の「備行宮秘解」は教師用虎の巻といったところであろう。ほかに「軍詞之巻聞書」（金沢市立図書館蔵）があるが、これは門弟の聞書で、講義内容を推測するには役立つが、それ以上の効用に乏しい。（未完）

注

(1) 石岡久夫氏・「日本兵法史上」三〇一P。初め甲州古伝流を受け、のち甲州本伝孫子当流を称した。

(2) 同書、二九一P。「その後の甲州分派の諸流に対しては、むしろ古流というべき景憲兵法の正伝に近いのではなかったかと思われる」。

(3) 軍語ハ往古ヨリ武夫ノ常談ナレバ今メカシク言フマジキ事ナレド太平ノ御代ニハ常ニ言フベキ事モナケレバ自ラ忘レ侍ラ
ン歟(略) 既ニ慶元浪速ノ役ヨリ寛永島原ノ変ニ及ンデ其間二十二年ナリシニ諸士ミナ軍語ヲ忘レ可笑言葉多カリシトナ
(一全流、近松茂矩、「軍語摘要」)。

(4) 石岡氏、同書、二五八P。

(5) 「緯糸集」の卷末に「延宝己卯春三月八日 一瓢軒直良 服部実方男」とあり、直良から実方への伝授を示す。

(6) 太田尚充・「八戸藩甲州流軍学研究序説(一)——八戸藩導入の由来——」(八戸市立図書館・「文書館報」)。

(7) 島田勇雄・「兵法諸流と武者言葉との関係についての試論——小笠原流系「訓閲集」を中心に——」(近代、五〇号)。

(8) 私は石岡氏の洩らされた伝書類を発見したことより「訓閲集」を次の如くに分類している。甲類、京都家系政清伝。乙類、氏隆系、天、氏隆百二十字之事、地、上泉信綱系、人、岡本半介系。丙類、総領家系。丁類、赤沢家系。戊類、庶流系。岩村伝・小池伝・上原伝・水島伝。己類、異本諸系。

(9) 註7参照。

(10) 島田・「近世説話集の表現」(講座「日本の説話」七巻)。

(11) 高橋昌明氏・「騎兵と水軍」(有斐閣新書、日本史(2)、中世1)。中世前期に「乗馬の郎等以上が社会的に武士と認められていた。(略) 武士とは騎馬武者のこととも規定しうる」とされ、また「八世紀〜九世紀の政治的・軍事的状況が弓射騎兵中心の軍制や軍事集団をうみだしたこと、その系譜をひいて武士が出現したこと」の二点が、中世武士と合戦を騎兵・騎馬戦闘としたいま一つのそしてその歴史的な理由であったのである。」とされる。その中世の伝統が、鉄砲の伝来によって戦術上の大展開を見た近世の兵学思想になお残存していたと言えるのであろう。